明暗分ける最終決戦へ

在学中

同志社アトム ラグビー部 紺グレ

荒波に立ち向かう

裏面 本紙ラグビー班 徹底解剖 なぜ負けた 敗因分析

2・3面 選手紹介

4・5面 1年間を振り返る 軌跡

6・7面 企画面

8面 スタッフ紹介

〒602-8580 京都市上京区新町上立売西入ル西大路町
TEL075-251-3185 © 同志社大学体育会機関紙
Doshisha Sports アトム
令和５年（2023） ラグビー特集号
11/30 木曜日
http://doshisha-atom.net/
発行人 飯田要次郎
編集人 丸山潤一郎

2023 ムロオ関西大学ラグビーAリーグ

関西の敵を砕け

12/2 11:45 K.O. vs. 関学大
@東大阪市花園ラグビー場第１グラウンド

対関大戦で突破を試みる山本敦

◆山本敦輝

（やまもと・あつき）
２００２年１月２日生まれ。大阪府・常翔学園高校出身。今年度ラグビー部の主将を務める。ポジションはＰＲ。１７５㌢・１１０㌔。社会学部４年。

『応援してくれる人たちに恩返しや感動を与えることが自分たちの責任だと思う』（山本敦）

同志社ラグビー部の年度別成績

年	関西	選手権	選手権の勝敗校
64	1位	ベスト4	法　大
65	1位	ベスト8	早　大
66	1位	ベスト4	早　大
67	1位	ベスト4	法　大
68	1位	ベスト8	慶大・早大
69	1位	ベスト4	日体大
70	2位	ベスト8	早　大
71	1位	ベスト4	早　大
72	1位	ベスト8	明　大
73	辞退	不出場	早　大
74	2位	ベスト8	早　大
75	2位	ベスト4	明　大
76	1位	ベスト8	早　大
77	1位	ベスト8	明　大
78	1位	ベスト4	日体大
79	1位	準優勝	明　大
80	1位	優　勝	同志社
81	1位	ベスト4	明　大
82	1位	優　勝	同志社
83	1位	優　勝	同志社
84	1位	優　勝	同志社
85	3位	ベスト8	明大・慶大
86	1位	ベスト4	大東大
87	2位	準優勝	早　大
88	1位	ベスト4	明大・大東大
89	2位	ベスト8	早　大
90	2位	ベスト4	明　大
91	3位	ベスト8	明　大
92	1位	ベスト8	法　大
93	1位	ベスト4	明　大
94	2位	ベスト16	大東大
95	1位	ベスト8	明　大
96	1位	ベスト4	明　大
97	5位	ベスト16	関東学院大
98	3位	ベスト8	関東学院大
99	1位	ベスト4	慶　大
00	1位	ベスト4	関東学院大
01	2位	ベスト8	関東学院大
02	1位	ベスト16	早　大
03	1位	ベスト4	関東学院大
04	1位	ベスト4	早　大
05	1位	ベスト4	早　大
06	3位	ベスト16	関東学院大
07	1位	ベスト16	早　大
08	2位	ベスト8	早　大
09	4位	ベスト16	帝京大
10	7位	不出場	帝京大
11	2位	ベスト8	帝京大
12	6位	不出場	帝京大
13	2位	2nd敗退	帝京大
14	3位	2nd敗退	帝京大
15	1位	2nd敗退	帝京大
16	2位	ベスト4	帝京大
17	6位	不出場	帝京大
18	5位	不出場	明　大
19	2位	3回戦敗退	早　大
20	2位	出場辞退	天理大
21	4位	ベスト8	帝京大
22	3位	ベスト8	帝京大

残酷な現実

長いトンネルの出口は見えない。止まらない連敗地獄。勝利を告げるホイッスルは一向に鳴らず、一度狂った歯車はかみ合わない。結果が出ない故に生じる焦り、名門のジャージーを身にまとう重責。膨らんだ不安が徐々に戦士たちの気迫を奪っていった。

大学選手権3連覇をはじめ、ミスター・ラグビー平尾誠二氏らが成し遂げた栄光は現在にも語り継がれる。一昔前は常に他大学から目標とされる存在だったが、すでに挑戦者へと立場は変わった。全国優勝から遠ざかり39年、最後の関西優勝から8年。今季は力が拮抗（きっこう）する中、山本敦組に課せられた使命は初勝利と1部残留だ。最後の戦いで目の前の敵を打ち砕き、次世代へ復権を託す。

原点戻り未来へ繋ぐ希望の光灯せ

運命の一戦

選手権出場の可能性が消滅し、チームは目標を再設定。応援される組織になり、真の同志社ラグビーを体現する「ザ・同志社」を新たに掲げた。先代の思いは紺グレに染みついた血、汗、涙とともに決して薄れることはない。泥沼の渦中でもがき苦しんだ姿も、次世代を担う後輩たちに継承されていく。ただ、選ばれし23人には勝って未来へバトンをつなぐ義務がある。

真価が問われる最終決戦は刻一刻と迫る。山本敦は「応援してくれる人たちに恩返しや感動を与えることが自分たちの責任」と言い切った。どん底から蘇生する初勝利、意地の1部残留へ。失うものは何もない。決然たる意志を固め、逆風をはね返せ。

【勝部健人】

はかない夢

2023年1月8日、同志社を50－0で破った帝京大が大学選手権で連覇を達成。宮本監督と4年生たちはスタンドから戦況を見つめていた。直近で国立競技場のピッチに立ったのは、指揮官が大学1年生だった2006年1月。「大学選手権決勝の雰囲気、どういう光景が目に見えるかを生で見ないといけない」。毎年口にする「日本一」を肌で感じる目的があった。刺激を受けた選手たちは初めて大学王者の名前を目標に加える。「帝京大に勝って日本一」。スローガンには「砕」を掲げ、「昔の同志社は強かったというイメージを変えたい」（山本敦）と願いを込めた。

日本一への挑戦権を得るには、秋のAリーグで関西3位以内が絶対条件だった。しかし、望み通りの成績は残せない。2年連続で開幕節を落とすと、10月には昨年入れ替え戦に回った関大と摂南大に屈辱的敗北。負の連鎖は断ち切れず、6連敗で史上初の最下位と13年ぶり2度目の入れ替え戦出場が決定した。「113年の伝統、先輩方の顔に泥を塗った」（芦塚・社4）。全員が責任を受け止め、肩を落とした。

113th Team Yamamoto 砕

西の雄がどん底に沈んでいる。7月以降白星はなく、Aリーグ開幕6連敗。かつて大学ラグビー界を席巻した「強い同志社」の面影はない。行き場を失い、創部史上2度目の入れ替え戦出場が確定した。紺グレに刻まれてきた伝統、歴史、誇り。言葉では表現できない重圧がのしかかる。難局に直面する中、山本敦組に課せられた使命は初勝利と1部残留だ。最後の戦いで目の前の敵を打ち砕き、次世代へ復権を託す。

◆Aリーグ順位表◆（11月30日現在）

順	大学名	勝	敗	勝点
①	天理大	6	0	29
②	京産大	6	0	28
③	関学大	4	2	17
④	近　大	3	3	12
⑤	関　大	2	4	9
⑥	摂南大	2	4	8
⑦	立命大	1	5	8
⑧	同志社	0	6	2

大所帯率いる愚直な先導者

絶対的支柱。この言葉が最も似合う。1年時から不動の背番号1として、紺グレに心血を注いできた。

昨冬、己を律し限界に挑戦する姿勢が評価され同期からの投票で主将に選出。しかし、伝統校を背負う重圧から春先は状態が上がらなかった。「主将の気持ちはなってみないと分からない」。それでも楽しむことを忘れず、再び自分のプレーに矢印を向けた。

原点は兄の背中を追った中高時代にある。ぽっちゃりで愛嬌（あいきょう）があった少年は楕円球と出会い、素直で真面目な好青年へ成長。厳しい基礎練習に耐え抜き、学生最強ＰＲ（プロップ）に至る土台をつくった。

ここ一番の爆発的な一押し。ピンチで見せるジャッカル。鉄壁のスクラムと肉弾戦で泥くさく汗を流し、何度も展開を好転させてきた。誰よりも熱く、強く、激しく。覚醒した山本敦輝を止められる者はいない。

レイアウト　丸山　潤一郎

常翔学園元監督野上氏「充実感を持って卒業してほしい」

▲山本敦へ向けた色紙を持つ野上氏

◆野上友一（のがみ・ともかず）１９５８年６月１６日生まれ。大阪府・常翔学園高校元監督で、現在はＧＭを務める。

常翔学園高校を２度の日本一に導き、昨年９月まで指揮を執った野上友一氏。これまで多くの選手を紺グレに送り出してきた名将に教え子・山本敦輝の高校時代について伺った。

――高校時代の印象は？

最初は物言わずやった。だんだん力が発揮されるようになってくると、いろんなことを喋り出したという感じかな。

――ＰＲ（プロップ）とＨＯ（フッカー）の両方をやらせていた意図は？

体も大きいから十分にできるし、将来的にはいろいろ便利やから。ＨＯであの体がおったら、それは相手もかなり嫌やな。

――高校３年間で１番成長したと思う部分は？

スクラムで自信を持てたこと。ＦＷは（全体的に）体がでかかったからスクラムも押せるし楽しかったと思うよ。

――印象的なエピソードは？

毎日スクラムを組んでしんどそうにしとった。でも（その分）試合ではやっぱり楽しそうにしとったね。

――残り少ない大学ラグビーに期待することは？

なんぼ言うたって同志社のキャプテン。この後もラグビー人生が続いていくわけやから、周りに後からあの時格好が悪かったなって言われることがないように、最後まで一生懸命に取り組んでもらいたい。人生の中で大学生の頃は1番自由にできる青春真っただ中。その最後やから勝ち負けだけやなしに、「やったぞ」という充実感を持って卒業してもらいたいと思います。

【聞き手・勝部健人】

ポジション表記：PR（プロップ）、HO（フッカー）、LO（ロック）、FL（フランカー）、NO8（ナンバーエイト）、SH（スクラムハーフ）、SO（スタンドオフ）、CTB（センター）、WTB（ウイング）、FB（フルバック）

躍進

久保太陽

「誰よりもコンタクトが強い」と太鼓判を押されるペネトレーター（突破役）。一度ボールを受け取れば、芯を射抜く重厚なヒットで防御にくさびを打つ。

ラガーマンだった祖父と父の意志を受け継ぎ、物心がついた頃には両手で楕円球を抱えていた。大阪府スクール選抜を経て、実家から近い報徳学園に進学。「スキルアップの面では、高校3年間が一番成長できた」とハイレベルな環境で心身ともにもまれた。

「関西に残りたい。歴史と伝統のあるチームは同志社しかない」。高校2年生の冬、同志社から誘われると二つ返事で快諾した。入学後もすぐに才能を顕示。学年で唯一大学選手権のピッチに立ち、日本中に名を広めた。しかし、主力として期待された昨秋は直前の負傷から不調に陥る。「なかなか結果が出ず厳しかった」と下のカテゴリーでもがき苦しんだ。

座右の銘は「積小為大」。壁に直面した久保太はこの言葉を信じ、自分自身を見つめ直した。春も体重増加のため第一線から離れたが、夏合宿からAチームに合流。「ボールキャリーが強くなり、体を当てるプレーができるようになった」。対日大戦では2トライを記録し、自信を深めた。

代名詞の突進力以外にも、FW離れした脚力とテクニックで一瞬の隙も見逃さない。第3節ではラインの整備が遅れたラックサイドを突き、オフロードパスで得点をアシスト。繊細なフットワークと粘り腰で衝突局面の範を示した。

「全てを出し切って、悔いのない内容でシーズンを終わりたい」。紺グレの切り込み隊長に恐れるものは何もない。かつての輝きを取り戻し、腕を鳴らせ。

大山卓真　誇り高き小兵

「HOは一番難しいポジション。でも8人をコントロールできたら一番かっこいい」。スクラムの中心で大軍を統御するだけでなく、ラインアウトのスローイングも務める。命運を握るセットプレーの要だ。不安定だった獲得率を上げるため、全体練習の開始30分前に基本的なスキルを再確認。第4節ではセットプレー成功率100％と安定した数字を残した。

2年時でFLからHOに転身。「ポジションにとらわれず自分に向き合うことができた」。うまくいかない時期が続いたが、3年時に体重を10㌔増量し大いに成長を実感。目に見える結果が自信へとつながり、己の可能性を広げた。

「勝たないと面白くない」。今春からはFWリーダーに就任。穏やかな表情からは想像できない執念で、統制だけでなく士気の面でもFW陣を率いてきた。紺グレをまとい続ける限り、ラグビー人生の全てを懸けて立ち向かう。

三輪拓翔　不死身の起爆剤

果敢なタックルとボールキャリーが持ち味のPR。昨年は対関学大戦でAリーグデビューを果たす。だが、自身がイエローカードを受けたことが一因で逆転負けを喫し、悔しい思いを経験した。

心機一転し練習に励むも、今年3月には首のヘルニアと診断され右半身のしびれに苦しんだ。「どうしたら復帰後に活躍できるかを考えてきたのが成長につながった」。約半年間は映像からプレーのイメージを膨らませた。

復活を遂げた三輪は、リザーブながらスクラムに大きな安定感をもたらす。「元気を与えインパクトを残したい」。若きスクラムリーダーの熱い思いがチームを突き動かす原動力になる。

永住健琉　肉弾戦の主役

100㌔超えの鍛え抜かれた屈強な肉体。機動力を生かしたボールキャリーで敵を翻弄（ほんろう）し、力強くゲインラインを破る。

オフから栄養管理を意識し、食生活を改善。9㌔のサイズアップに成功し、当たり負けしない体格を手に入れた。LO、FL、NO8と臨機応変に対応するユーティリティー性を持ち合わせ、最前線で粉骨砕身。背中でチームを鼓舞している。

「責任を果たしたい」と人一倍強い信念を胸にさらなる進化を誓う。唯一無二のフィジカルを最大限に駆使し、勝利への航路を切り開け。

林慶音　攻守で魅せる大黒柱

「しっかり声を出して、チームの士気を高めたい」。昨秋は1年生ながら全試合にスタメン出場し、今やFW陣を引っ張る中心選手だ。

中学1年生でラグビーを始めるとすぐに才能が開花。めきめきと実力をつけ、U19日本代表候補にも選出された。長所は180㌢・102㌔の鍛え抜かれた体で敵をなぎ倒すボールキャリー。「1トライを取れたことは自分の収穫」と第3節では苦しい展開の中でトライを決め、チームを活気づけた。今季は徹底的に基礎を固め、ディフェンス面も強化。「関西の大学で日本一になる」と掲げた目標を忘れず、高い向上心で前進し続けている。

「ラグビーは人生そのもの。多くの仲間や指導者に出会えて、人としても成長させてもらった」。競技への愛と仲間への思いは人一倍強い。感謝をプレーで体現し、味方を奮い立たせる。不動のNO8が熱い闘志を燃やし、紺グレ逆襲の火付け役となれ。

福岡壮太郎　花開いた苦労人

決して平たんな競技人生ではなかった。高校時代は表舞台に立てず、もどかしさを募らせる。理想と現実のはざまでもがく日々を変えたのは、人羅奎太郎（社卒）、田村魁世（スポ卒）との出会いだった。「努力をし続けた者が最後は勝つ」。誰よりも遅くまでグラウンドに残る2人を追いかけ、今秋は9番の座を勝ち取った。

伝統の展開ラグビーを体現するにはSHの明晰（めいせき）な頭脳が不可欠だ。「チームがやろうとすることを遂行させる」。14人の味方を自由自在に動かし、小柄ながら大きな責任を負う。

「人とのつながりを与えてくれたラグビーに感謝しかない」。完全燃焼でシーズンを終えるべく、不屈の闘志で戦地を駆ける。

市川亮太　陣地広げる魔術師

抜群のキック力と安定したタックルでゲームを動かすユーティリティープレーヤー。幅広いスキルが必要とされるCTBでマルチに働く姿を披露し、首脳陣から絶大な信頼を置かれている。

弟の影響で始めたラグビーは今年で12年目に突入した。「Bの強いチームに入部した」。東海大大阪仰星で頭を使ったプレーを学び、同志社の門をたたく。ひたむきに努力を重ね、全てのプレーレベルを向上させた。鍛え上げた自慢のフィジカルを生かした破壊力で行く手を阻む鉄壁を粉砕。また、正確なロングキックで好機をつくり出し、ラインを押し上げる。

紺グレを背負うのも残りわずか。多才なパフォーマンスで最後の戦いに挑み、4年間の集大成を示せ。

上嶋友也　躍進の原石

ボールを持てば会場が沸く。グラウンドでひときわ存在感を放つ上嶋は、1年生ながら紺グレファンを魅了してきた。強みはタッチライン際で発揮される突破力。鋭いステップを刻み、相手の守備網をこじ開けるとそのまま加速し、インゴールへと突き進む。屈強なランでゲインし、何度も窮地を救ってきた。

眠っていた原石が磨かれたのは高校時代。熊本から東福岡に通学し、ハイレベルな選手たちにもまれながら懸命に鍛錬を積んだ。オフフィールドでの努力も惜しまず、ウエートトレーニングを積極的に取り入れるなど、接点での強さを追求。全国高校ラグビー大会決勝戦ではハットトリックを決め、全国制覇の立役者として名をとどろかせた。

高い経験値と実力で入学直後からAチームへ定着する。春の大一番対天理大戦では途中出場ながら勝利を決定づけるダメ押しトライを奪取。ポイントゲッターとして、一糸乱れぬ攻撃に欠かせない存在であると証明した。

快進撃を見せてもなお、何事にも妥協しない姿勢は変わらない。「ボールを持ったら絶対にゲインしてくれると思われる選手になりたい」。武器であるランニングスキルに加え、攻守にわたる献身的なプレーで完全無欠のWTBを目指している。

圧巻の上嶋劇場は始まったばかりだ。最終目標は再び「日本一」になること。昨冬の花園で頂に君臨した男は、そこから見える景色が紛れもなく壮大であることを知っている。だからこそ今度は紺グレジャージーで緑の大地を駆け抜け、復権へとつなぐ白線まで閃光（せんこう）を走らせる。

芦塚仁　ファイアーガ義信タビデ

偉丈夫な超新星

ボールを持つと必ず前に出る突破力の高さは上級生にも劣らない。常翔学園ではFW第3列も担い、徹底的に接点の強さを磨いた。「これからもっとすごい選手になる」（常翔学園元監督・野上氏）と飛び抜けた身体能力はさらなる飛躍を予感させる。

「アタックもディフェンスも勢いづけられるようなプレーヤーになりたい」。進化を続ける新鋭が攻守でハードワークし、観客をくぎ付けにする。

大島泰真　鬼才曲芸師

ルーキーイヤーから紺グレに袖を通し、チームの心臓であるSOを担ってきた。中学時代は全国大会で準優勝。京都成章では主将を経験し、全国ベスト8に導いた。

そんな天才司令塔の最大の武器は卓越した観察眼。「保守的になるのではなく常に攻撃する意識を持っている」。わずかなスペースを見つけ出すと、鋭いステップで迷わず突破。170㌢と小柄な体型ながらも、目の前のディフェンスを脅威にさらす。

「とにかく試合に出場し、誰よりも楽しんでプレーしたい」。観客を魅了するだけでなく、自らもゲームを楽しむエンターテイナー。展開ラグビーを意のままにし、立ちはだかる壁を突き破れ。

高明攻撃陣　好機仕留めるBK

最強軍団の力見せる

渋く光るFW

山本敦輝

Atsuki Yamamoto

大阪府・常翔学園高校出身
175㌢・110㌔／社会学部4年

足元を狙った力強いタックルと、敵陣へ突破する機動力を持ち合わせる随一のオールラウンダー。「天理大に勝ちたい思いがあった」。入学当初は1年生で唯一、天理大を下した関西制覇のピッチを経験。一時はけがの影響を受けながらも、復帰後から現在に至るまでFLとして不動の地位を築いている。

幼少期から始めたラグビーは人生そのもの。高校時代、聖地花園で全国優勝を目指すも苦杯をなめた。しかし、「ずっとやってきたから中途半端では終わりたくない」と楕円球に導かれるように顔を上げる。逆境を力に変える強靭（きょうじん）な精神力で、紺グレの中核に成長を遂げた。

奥平が羨望（せんぼう）のまなざしを向けるのは、今秋ラグビーワールドカップで世界一に輝いた南アフリカ代表FLのクワッガ・スミス。世界に名をはせるプレーヤーを研究し、大柄な選手に引けを取らないコンタクトスキルを維持している。

今季はウエートトレーニングを通したフィジカルの増強にも力を入れた。「タックルでチームに良い流れを持っていけるところが強み」。足の運び方を見直し、当たりに負けない体幹を武器に虎視眈々（たんたん）と攻撃に絡むチャンスをうかがう。

「自分たちの代になるから、言葉でチームを引っ張ることができるようになりたい」。最高学年を迎える来季に求められるのは、実力だけでなく大所帯をまとめ上げるリーダーシップだ。残りのシーズンに闘志を燃やし、名実ともに不可欠な存在になれるか。まだ見ぬ景色を追い求め、奥平の挑戦は終わらない。

奥平 都太郎

屈強万能手

西濱悠太

「なんでもできる」と首脳陣からも評価される万能戦士。主戦場は第3列ながらもさまざまなポジションに起用され、全てをそつなくこなしてきた。

ラガーマンだった父に憧れを抱き、楕円球を追い始めて今年で17年目。「試合中に熱くなり過ぎないのが自分の強み」。重宝されるのは、培った知識から生まれる冷静な判断力だ。さらに高い運動量で縦横無尽に戦場を駆け抜ける。今シーズンはけがに苦しめられたが、無数の修羅場をくぐり抜け、鋼のような肉体を手に入れた。

「相手に関係なく、ただ自分たちのやってきたことを信じて勝利を目指す」。内に秘めた熱い思いをたぎらせ、今こそ4年間の集大成を示すとき。プレーの細部に情熱を宿し、行く手を阻む強敵をなぎ倒せ。

鉄壁打ち砕く

木村圭佑

昨季からジュニアリーグで場数を踏み実力をつけた。慶大との定期戦ではチーム内MVPに選出。第一線で頭角を現した。

しかし、春決勝の対京産大戦で右膝を負傷。それでも意気消沈することはなかった。「復帰したら必ずAチームで試合に出る」。強い意志でリハビリを乗り越えた。

第4節で紺グレに返り咲くと、寺北と共に攻撃の起点となり好機をつくり出す。頑丈な体格を生かした打開力、セットプレーの軸を支えるパワー。求められた役割を果たし、攻守で安定感を高めた。

「目の前の敵を倒すことだけ意識している」。命運が懸かる大一番でも守備網を切り崩し、希望の道筋を示せ。

寺北亘佑

攻防戦の要

「体重が増えたら試合に出られる」。常翔学園時代には、恩師の言葉をきっかけに4カ月で15㌔の増量に成功。入学後はウエートトレーニングの他に、自炊で栄養価を考えた食事管理も徹底してきた。日々の積み重ねで筋力をつけると、昨秋から中核を担う正LOに定着。自らの役割を「縁の下の力持ち」と表現する。

上級生として練習の雰囲気づくりにも気配りを欠かさない。明るい性格でチームの士気を保ち、今年度はラインアウトリーダーに就任。「自分が1番うまくなり、知識をつけなければいけない」と奥深さを突き詰めた。初節では負傷退場するも第4節で復帰。ブランクを感じさせない活躍で、セットプレーから流れを生み出した。

「親に楽しんでプレーする姿を見せて恩返しをしたい」。次期主将候補もうたわれる人格者が、自身の仕事を遂行する。

上野聡大

敵怯ませる敦輝の後継者

指導者である父に影響され、すでに17年のラグビー人生を歩む。中学生の頃、兵庫県スクール選抜に選出されたことを境に著しく成長を遂げた。憧れは常翔学園の先輩で、現主将の山本敦。元々は同じ1番を背負い、「超えたい」と身近にいる偉大な背中を常に追いかける。

PRを務める上野は181㌢、116㌔と鍛え上げられた肉体を駆使し、最前線で幾度となく相手の突破を阻む。夏合宿の対筑波大戦ではスクラムで反則を誘い、対面を一時退場に追いやった。日頃の努力が結果に表れ、確固たる自信につながった。

「関西一強い3番になりたい」。持ち前のパワーとストイックさで攻防戦の支柱となる。

長島華太

頭脳明晰な漢

不屈の精神から繰り出されるタックルと、隙を突く戦略的な立ち回り。セットプレーの要を担うHOとしてフィールドに君臨する。

「満足と妥協は成長を止める」。中学時代の監督からもらった言葉を忘れたことはない。培ってきた明敏な頭脳は多方面で生かされている。

今季は負傷により第1、2節こそ戦列を離れたが、コンディションを整え第3節で2番に抜てき。第4節ではリザーブから途中出場した。「もう攻めるしかなかった」。後半37分には岡野のラインブレークに素早く反応し、ゴールポスト下にトライ。劣勢状態だったフィフティーンを鼓舞した。

「熱く体を張るのも良いけど、賢く頭を使って相手が嫌がるプレーを見せたい」。がむしゃらに突き進んだルーキーイヤーから一転し、2年目は視野の広さを光らせている。己の道を信じ、輝ける未来へ前進せよ。

岡野春吾

最強の番人

いつも真剣なまなざしには計り知れない戦意が宿る。

山本敦と共にラグビーに没頭した高校時代からステージを同志社へ移すと、デビュー戦からスターの片りんをうかがわせる。1年生ながら初の公式戦で決勝トライを奪取。中核としての責任感が芽生えた瞬間だった。

一方でディフェンス面の力不足でスタメン入りを逃す時期もあった。それでも「質が変わった」と当たり負けしない激しさを手に入れ、闘牛のように目の前の障壁を突き飛ばした。

長所は自他ともに認める破壊力としつこいタックル。ボールを受け取れば必ずゲインし、次のフェーズにテンポをもたらす。また、岡野はラグビーの魅力を「観客にも伝わる気持ちの熱さ」と話す。自らの突撃から何度も見る者をうならせ、再三にわたり戦況を変えてきた。

これまでは黙々と仕事をこなしてきたが、4年間を通して気持ちの持ち方が大きく変化。指示待ちだったスタイルは「考えるラグビー」へと進展した。思うような結果が出ない中でも「試合では絶対に楽しむ」と心身ともに己の最大限を追求する。

「レギュラーとして出場することしか頭にない」。紺グレの重責を背負い、苦悩や喜びを味わい続けた学生生活も終焉（しゅうえん）が迫る。自身の集大成とともに伝統のジャージーに袖を通し、来季以降へ足跡を残す。

縦横無尽にグラウンドを駆け巡り、闘志をみなぎらせる。揺るぎないメンタルで屋台骨となり、最後尾から声を張り上げてきた。

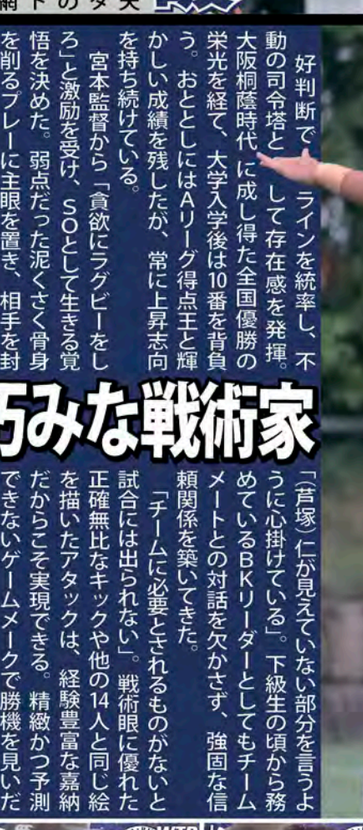
FBに必要不可欠なことは「安定」と語る。攻守で光るのはいかなる状況でも冷静沈着な判断力だ。「自分のミス1つがチームの勝敗に響く」と最後のとりでとして役割を全う。勇猛かつ精密なタックルで完璧なきまで獲物を仕留める。また、スペースを見つけると自ら仕掛けラインブレーク。俯瞰（ふかん）的に観察するタカのような目も兼ね備え、積極的なライン参加で着実にトライへ結び付ける。

6月に無念の戦線離脱。オフィールドから戦況を見守った。そんな状況でも悔しさを押し殺し、下働きに尽力。ウオーターボーイとして間近で助言を送り続けた。さらに、リハビリ生活を経て足腰の強化に成功。激しいコンタクトでもバランスの崩れないずぶとさを得た。逆境を乗り越え、より磨きのかかった姿で戦列に加わる。「復帰するために支えてくれた人たちに結果で返したい」。感謝とともにさらなる躍進を誓った。

「宮本監督との出会いを通してラグビーに取り組む姿勢が大きく変わった」。これまでの活躍とリーダーシップが評価され、今春からはバイスキャプテンに就任。熱意を行動で表し、代名詞のコミュニケーション力でBK陣をまとめ上げている。

「一人一人が責任を持って目の前のプレーに全力を尽くす」。4年間の全てを懸けて学生最後の戦いへ。第一線で戦う主将と共に、鬨（とき）の声を響き渡らせろ。

嘉納一千



巧みな戦術家

好判断で動の司令塔として存在感を発揮。大阪桐蔭時代に成し得た全国優勝の栄光を経て、大学入学後は10番を背負う。おとしにはAリーグ得点王と輝かしい成績を残したが、常に上昇志向を持ち続けている。

宮本監督から「貪欲にラグビーをしろ」と激励を受け、SOとして生きる覚悟を決めた。弱点だった泥くさく骨身を削るプレーに主眼を置き、相手を封じ込める低いタックルを磨き上げる。

「（芦塚）仁が見えていない部分を言うように心掛けている」。下級生の頃から務めているBKリーダーとしてもチームメートとの対話を欠かさず、強固な信頼関係を築いてきた。

「チームに必要とされるものがないと試合には出られない」。戦術眼に優れた正確無比なキックや他の14人と同じ絵を描いたアタックは、経験豊富な嘉納だからこそ実現できる。精緻かつ予測できないゲームメークで勝機を見いだせ。

桃田涼平

俊足で突破

フィールドを駆け抜ける韋駄天（いだてん）。春はAチームのスタメンに定着し、点取り屋としての責務を全う。持ち味のスピードを駆使したランで何度も防御網を切り開いてきた。

ピッチに足を踏み入れると、普段の冷静な振る舞いは一変する。声を張り上げ、一度好球を手にすれば、ゴールラインへ一直線。今年2月にはセブンズシニアアカデミーにも選出され、フィニッシャーに欠かせない得点への嗅覚を養った。

「ボールが回ってきたら全部トライする気持ちで向かう」。苦境に立たされても、この男は立ち止まることを知らない。疾風のごとく仲間の思いを懸命につなぐ。

藤田海元

沈着な中継者

持ち前の判断力と両足から繰り出すキックを武器にするゲームメーカー。昨年からAチーム入りを果たすと、今春はSHの1番手を担い、紺グレを勝利へ導いた。

「キックには1番練習時間を費やしている」。普段の練習から実戦を想定し、スペース感覚を養う。またテンポを生み出すだけでなく、小柄ながらもパワフルなプレースタイルを見せる。第4節では緩急をつけた球出しで歯車の合わない戦況を変えた。

戦術の考案に携わるドライバーリーダーも務め、勝ちへのこだわりは人一倍だ。熱い思いを胸に、味方へパスを送り続ける。

レイアウト　浅川　明日香

勝利を目指し、密着取材

漆黒撃破も伸び悩んだ春

2年ぶりに決勝進出

ダメ押しトライを決めた上嶋（右）に駆け寄る嘉納（左）

5/28 対天理大　41−33
春季トーナメント戦 準決勝
於・同志社大学京田辺キャンパスラグビー場（京都府）

ホーム京田辺グラウンドがあふれんばかりの観客で埋め尽くされた大一番。大学選手権の切符を手にした昨冬に続き、41−33で漆黒の壁を破った。

キックオフから激しい撃ち合いだった。10分に先制するも、中盤以降は自陣に押し込まれ一時は追いかける展開に。それでも終了間際、流れを変えたのは芦塚だった。藤田海のグラバーキックに反応すると、敵陣ゴール前でボールを回収し、インゴールへ飛び込む。21−19とし、勝負の行方は残り40分に託された。

「一人一人の勝ちたい意識が相手より上回った」（芦塚）。シーソーゲームが予想される中、後半も先に好機をつくった。同1分、福田がタッチライン際に押さえ追加点。同15分にも嘉納が3点を加え引き離した。その後は出足の速いディフェンスでキーマンの留学生を封じ込める。「相手が嫌がっていた。我慢強さで勝てた」（山本敦）と及第点以上だった。

天理大の運動量が落ちた同37分には、ルーキー上嶋がダメ押しとなる公式戦初トライを決め勝負あり。１つの山場を越え、関西優勝に王手をかけた。

同	3	3	0	21	3	1	1	20	41
		TGP		前		TGP		後	計
天	3	2	0	19	2	2	0	14	33

価値ある好発進

互いをたたえ合う選手たち

5/14 対立命大　24−15
春季トーナメント戦 2回戦
於・立命館大学ＢＫＣグリーンフィールド（滋賀県）

強化の春が始まった。「ここで立命大に対して何かを変えないといけないと思っていた」（宮本監督）。昨年は公式戦で連敗を喫した宿敵を24−15で下し、白星発進。価値ある1勝を手にした。

悪天候でボールが滑ることを予想。「キックでエリアを広げていく」（嘉納）とハーフ団によるキックを中心とした戦法で対応した。

開始早々、ＦＷ陣の奮闘が好機を呼びディフェンスラインを割る。観察眼を光らせた福田が先制点を奪取すると、けがから復帰したばかりの嘉納もインゴールへ。その後2トライを与えたが、21−12とリードしハーフタイムを迎えた。

互いにＰＧ（ペナルティーゴール）を決め合うも、60分以降は一進一退の攻防を繰り広げる。得点板は動かず、鉄壁の防御で後半をノートライに抑えた。王座奪還に向けた開幕戦は9点差で快勝。「ディフェンスで粘って勝てた」（寺北）と好スタートを切った。

同	3	3	0	21	2	1	0	12
		TGP		前		TGP		立
	0	0	1	12	0	0	1	3
		TGP		後		TGP		後
	3	2	0	24	0	0	1	15
				計				計

昨秋王者に歯が立たず

鋭いタックルを受ける山本敦

7/2 対京産大　15−54
春季トーナメント戦 決勝
於・天理親里競技場（奈良県）

力の差は歴然だった。2021年以来2度目の春季トーナメント戦制覇を懸け京産大に挑むも、15−54で大敗。「正直優勝以外は同じ結果」と主将の表情は暗かった。

「セットプレーとコンタクトの局面でどこまでチャレンジできるかが鍵になる」（宮本監督）。指揮官の想定通り、勝敗に直結したのは接点と空中戦だった。序盤から反則を誘い、敵陣深くに侵入するも3本連続でラインアウトを獲得できない。一方の京産大はミスにつけ込み、着実に得点を伸ばした。

12点差をつけられた前半23分、けがの影響でベンチスタートだった嘉納を投入しテンポアップを図る。これが功を奏し、連続攻撃からのキックパスを受けた鈴木がゴールラインを割った。しかし、その後は留学生を中心としたコンタクトに押し負け、ブレークダウンでもボールに絡まれる。

「自分たちから相手の土俵に乗りにいったのでそこが納得できない」（宮本監督）。鍛え上げられた強靭（きょうじん）なフィジカルを押し出され、瞬く間に点差が広がった。

目標としていた関西優勝は遠く、春シーズンは不完全燃焼のまま終幕。課題が山積する中、秋での雪辱を誓った。

同	1	0	1	4	2	2	0	8
		TGP		京		TGP		前
	1	1	0	30	3	3	1	7
		TGP		前		TGP		後
	0	1	0	24	1	1	0	15
				計				計

重戦車に圧倒され敗戦

前進を阻まれる大山

6/11 対明大　8−38
和歌山ラグビーフェスティバル2023
第84回定期戦
於・紀三井寺公園陸上競技場（和歌山県）

同	0	0	1	3	1	0	0	5	8
		TGP		前		TGP		後	計
明	3	2	0	19	3	2	0	19	38

グラウンドに大粒の雨が降りしきる中行われた84回目の定期戦。10年ぶりの白星を狙うも、8−38で完敗を喫した。

自陣からＦＷとＢＫが一体となった攻撃を繰り広げる明大に対し、相反するゲームプランを採用した。「いつも通り、ディフェンスで流れをつくっていく」（嘉納）。序盤は互いに均衡を破れず、0−0で時計の針は進んだ。

しかし、終始劣勢だったセットプレーからリズムを崩した。前半16分、敵陣スクラムからＦＬの脇を抜かれ、先制点を献上。防御網のわずかなほころびを突かれ、その後も立て続けにトライを与えた。重戦車と称される明大ＦＷ陣に試合を制圧され、関東の壁の高さを痛感。「ディフェンスの時間が長くなった」（上嶋）と終盤に1トライを返すのがやっとだった。

夏合宿練習試合　開幕前に課題残す

ボールをキャリーする長島

於・サニアパーク菅平Ｄグラウンド（長野県）他

今季は最大22泊23日の夏合宿を敢行。4年ぶりに北海道北見市で戦術の土台をつくり、菅平高原では実戦感覚を養った。

積み上げの成果は対筑波大戦の前半に凝縮されていた。「良い絵を見ることができた」（宮本監督）。接点で圧力をかけ、ターンオーバーからの反転速攻が機能。自由にボールを動かし、昨冬の全国4強から5トライを奪った。しかし徐々に点差を詰められ、後半ロスタイムの失点で逆転負け。「後半は相手の時間になった」（上嶋）。最初の40分は今季ベストゲームに近かっただけに、悔しさをにじませた。

主力の離脱が相次いだ対日大戦、対早大戦も勝ち星なし。力不足を痛感すると同時に、連係面で課題が浮き彫りとなった。

最終戦でゲームキャプテンを務めたエースは危機感を募らせた。「このままだと絶対に勝てない」（岡野）。本番が3週間後に迫る中、手応えを得られず帰京となった。

精彩欠いた

突破を試みる山崎

6/18 対早大　14−36
第51回愛知県ラグビー祭
於・パロマ瑞穂ラグビー場（愛知県）

悪い流れを断ち切れなかった。「ＳＯが代わるとゲームの流れも変わる」（山本敦）。経験豊富な4年生の戦線離脱が響き、攻守で歯車がかみ合わなかった。

ノーホイッスルトライを取られるも、序盤は市川のロングキックが光り一進一退の展開。だが前半27分にモールから失点すると、早大ハーフ団に手のひらで転がされ連続トライを献上した。

それでも「自分たちがボールを持つ時間が増えた」（上嶋）と後半は追い上げを見せる。同15分には自陣からオフロードパスをつなぎ、ファイアラガがゴール中央へトライ。3分後にも山崎のビッグゲインを起点に点差を詰めた。

「悲観的になる内容ではない」（宮本監督）。14−36で今季初の連敗も、内容は前戦より上向きだった。

同	0	0	0	0	2	2	0	14	14
		TGP		前		TGP		後	計
早	4	1	0	22	2	2	0	14	36

終盤失速も白星

ゴールラインへ駆ける石田

6/25 対慶大　49−36
ラグビーに熱くなれ！JUNE PRIDE2023
第104回定期戦　於・静岡県草薙総合運動公園球技場

104回の伝統と歴史を持つ慶大との定期戦。終盤に追い上げを許したが、接戦の末逃げ切った。

「モールのアタックは良い形でトライを取れた」（渡邊）。前半5分、ラインアウトからドライビングモールを形成。ゴールラインまで押し切り先制トライを奪う。その後も快進撃は止まらない。山本希のビッグゲインから村岡が軽快なステップで前進し、追加点。40分で5トライを挙げる猛攻を見せ、35−7で折り返した。

しかし後半は開始早々に落球すると、相手の攻撃に翻弄（ほんろう）される。「勢いを止めようとチームで話し合ったが修正できなかった」（木村圭）。ディフェンスラインの隙を突かれ、激しいコンタクトプレーに耐えられなかった。

「後半の内容が悪すぎた。100点満点中2点ぐらい」（宮本監督）。49−36で勝利したが、主導権を掌握できなかったフィフティーンに厳しい評価を下した。

同	5	5	0	35	2	2	0	14	49
		TGP		前		TGP		後	計
慶	1	1	0	7	5	2	0	29	36

記者が見た！激戦制した裏側

天理大撃破の裏側にはＢチームの奮闘があった。前日に行われた関西王者京産大Ｂとの一戦。1年前に10−80で敗れた屈辱を晴らし、26−13とダブルスコアをつけた。

その夜、宮本監督は印象的だったシーンを切り取りＬＩＮＥグループで共有。「昨日のゲームが今日の試合をつくってくれた」（宮本監督）。まるでフィールドに立つ15人にシンクロしたかのように、ワンチームが際立つ1日だった。切磋琢磨（せっさたくま）する仲間がＡチームに発破をかけたに違いない。

◆Ａチーム戦績表◆

日付	対戦校	スコア	勝敗
4/16	帝京大	0−89	●
4/30	立命大	47−28	○
5/14	立命大	24−15	○
5/21	立　大	54−19	○
5/28	天理大	41−33	○
6/11	明　大	8−38	●
6/18	早　大	14−36	●
6/25	慶　大	49−36	○
7/2	京産大	15−54	●
8/20	筑波大	43−49	●
8/24	日　大	26−34	●
8/27	早　大	12−70	●
9/17	立命大	7−35	●
9/24	近　大	17−31	●
10/1	関　大	29−31	●
10/22	摂南大	32−34	●
11/5	天理大	5−59	●
11/19	京産大	28−43	●

主な出場選手一覧

※試はリザーブを含む登録試合数

PR（プロップ）
- やまもと・あつき　山本　敦輝（社4）　常翔学園 175㌢・110㌔ 試16
- きたほり・まさひろ　北堀　誠博（文情2）　名古屋 178㌢・96㌔ 試7

SH（スクラムハーフ）
- うえの・そうた　上野　聡大（商3）　常翔学園 181㌢・116㌔ 試17
- ふくおか・そうたろう　福岡　壮太郎（スポ4）　御所実業 163㌢・70㌔ 試16
- みわ・たくと　三輪　拓翔（法2）　尾道 175㌢・104㌔ 試9
- ふじた・かげん　藤田　海元（商3）　東海大大阪仰星 170㌢・73㌔ 試15
- まえだ・たくや　前田　卓耶（スポ1）　報徳学園 178㌢・107㌔ 試10
- いしだ・たいよう　石田　太陽（法2）　東海大大阪仰星 167㌢・73㌔ 試5

HO（フッカー）
- おおやま・たくま　大山　卓真（スポ4）　報徳学園 166㌢・96㌔ 試18
- かのう・いっせん　嘉納　一千（スポ4）　大阪桐蔭 177㌢・86㌔ 試12
- ながしま・こうた　長島　幸汰（スポ2）　京都成章 175㌢・101㌔ 試8
- おおしま・たいしん　大島　泰真（スポ2）　京都成章 170㌢・77㌔ 試5
- あらかわ・しゅん　荒川　駿（法1）　東海大大阪仰星 176㌢・100㌔ 試11

SO（スタンドオフ）
- のぐち・だいすけ　野口　大介（経4）　修猷館 176㌢・86㌔ 試12

CTB（センター）
- わたなべ・ようじ　渡邊　陽二（経4）　小倉 179㌢・101㌔ 試8
- いちかわ・りょうた　市川　亮太（法4）　東海大大阪仰星 178㌢・90㌔ 試15
- てらきた・こうすけ　寺北　亘佑（スポ3）　常翔学園 182㌢・106㌔ 試14
- おかの・きょうご　岡野　喬吾（商4）　常翔学園 181㌢・98㌔ 試17
- きむら・けいすけ　木村　圭佑（政策3）　大分舞鶴 180㌢・102㌔ 試12
- もりおか・そら　森岡　蒼良（商1）　京都成章 176㌢・85㌔ 試7
- やまさき・はると　山崎　暖人（政策2）　國學院久我山 180㌢・103㌔ 試7
- ふぁいあらが・よしのぶ・たびで　ファイアラガ　義信・タビテ（社1）　常翔学園 172㌢・89㌔ 試14

FL（フランカー）
- にしはま・ゆうた　西濱　悠太（商4）　東福岡 177㌢・97㌔ 試8
- いしい・れお　石井　伶央（心理4）　國學院久我山 177㌢・93㌔ 試5
- くぼ・たいよう　久保　太陽（社3）　報徳学園 183㌢・105㌔ 試7
- ながずみ・たける　永住　健琉（スポ3）　東福岡 180㌢・101㌔ 試13
- すずき・たかとし　鈴木　崇敏（政策3）　磐城 173㌢・90㌔ 試10
- おくひら・とたろう　奥平　都太郎（法3）　東海大大阪仰星 176㌢・90㌔ 試14
- こーえん・もーがん・いつき　コーエン　モーガン　一樹（神2）　京都成章 173㌢・83㌔ 試4
- どひ・しょうたろう　土肥　祥太朗（法2）　同志社 168㌢・87㌔ 試5

NO8（ナンバーエイト）
- はやし・けいと　林　慶音（スポ2）　大阪桐蔭 180㌢・102㌔ 試5

WTB（ウイング）
- ふくだ・たいが　福田　大河（理工4）　寝屋川 180㌢・93㌔ 試6
- うちだ・はるたろう　内田　遥太朗（政策4）　大分舞鶴 173㌢・80㌔ 試3
- えぐち・しょう　江口　翔（社3）　東福岡 171㌢・78㌔ 試5
- やまもと・のぞむ　山本　希（スポ3）　石見智翠館 168㌢・78㌔ 試4
- ももた・りょうへい　桃田　涼平（商2）　報徳学園 171㌢・77㌔ 試14
- いわもと・そうじ　岩本　総司（社2）　常翔学園 178㌢・85㌔ 試9
- うえしま・ともや　上嶋　友也（スポ1）　東福岡 180㌢・87㌔ 試14

FB（フルバック）
- あしづか・じん　芦塚　仁（社4）　大阪桐蔭 177㌢・91㌔ 試8
- むらおか・りんたろう　村岡　麟太郎（文情3）　東海大大阪仰星 172㌢・80㌔ 試5

後手に回り悪戦苦闘の秋

「悔恨」の2文字だけが残る1年だった。最終節を残し、Aチームの通算成績は5勝13敗。春先は順風満帆に関西のライバルを倒したが、夏以降は一度も白星がなかった。10月22日の対摂南大戦を落とし、創部史上初のAリーグ開幕4連敗。その後も連敗記録を更新した。しかし、自信を失いながらも選手たちは懸命に戦った。結果だけでは見えない軌跡を目に焼きつけてもらいたい。そんな願いを込めて本紙ラグビー班が密着した激闘の数々を振り返る。

今年度通算成績 18試合5勝13敗

激闘の軌跡

ダブルタックルを受ける岡野

第2節 対近大

宿敵に屈服し暗雲漂う

9/24 17−31 於・皇子山総合運動公園陸上競技場（滋賀県）

秩序乱れ後退

過去2年敗れていた相手にまたしても敗北。規律が乱れ、自ら首を絞めた。

「前半でゲームの勢いを失った」（宮本監督）。開始早々にノックオンを犯すと、こぼれ球を拾われ先制トライを献上。その後も防御網を破られ、劣勢のまま試合を折り返した。

負のスパイラルからは抜け出せない。「ペナルティーが得点に結び付いた」（嘉納）。後半最初の10分で3つの反則を犯し、チャンスを与える。勝ち点5よりも勝利を優先した近大は2度のPG（ペナルティーゴール）を成功。28分にも失点し、勝負は決した。

それでも残り10分で反撃に出る。大島がディフェンスラインのギャップを突き、ゴールラインへ接近。BK陣が右サイドへ展開し、森岡がインゴールへ楕円球をたたきつけた。さらに5分後、テンポの良いアタックからフェーズを重ね上嶋がトライ。しかし、一度離された点差を埋めることはできなかった。

同		近
1	T	2
1	G	1
0	P	2
7	前	18
2	T	1
0	G	1
0	P	2
10	後	13
17	計	31

悔しい1本

たった1本のミスが痛かった。7—21で迎えた後半14分、敵陣5㍍ライン上でマイボールラインアウトを得る。モールを組むため、中央のリフトを選択した。しかし、HO荒川駿がボールを投げ入れた瞬間、近大のジャンパーが前に入り込みスチール。トライを奪えれば接戦に持ち込めただけに、悔やまれる判断だった。

第1節 対立命大

悔しさをあらわにする山本敦

9/17 7−35 於・東大阪市花園ラグビー場第2グラウンド

ゴールラインは遠ざかっていくばかりだった。激戦を制した春の対戦とは対照的な完敗。大学選手権出場へ向けた最初の山場を乗り切ることができなかった。

秋のスタートダッシュを決めるべく挑んだ試合は特別だった。前日のジャージー渡しには前主将の梁本（社卒）らが駆け付け、託されたバトンの重みを再認識。声出し応援も解禁され、スタンドは熱気に包まれた。

前半7分、ハイパントキックの処理に失敗し、ボールを渡す。直後に防御網の裏へキックを転がされ、立命大が再獲得。最後のとりでである嘉納も機能せず、先制トライを許した。その後も攻守両面で不安定さは消えなかった。大島が繰り出す多様なキックも奏功せず、後手に回る。後半29分に岡野が執念の独走トライを挙げるも、反撃はここまでだった。

「ミスが多くてボールが手につかなかった」（上嶋）。80分間劣勢に立たされ、7—35で痛恨の黒星発進となった。

同		立
0	T	3
0	G	3
0	P	0
0	前	21
1	T	2
1	G	2
0	P	0
7	後	14
7	計	35

開幕戦の悪夢

鬼門を破れなかった。昨年同様に花園第2グラウンドで行われた開幕戦に敗戦。宮本監督の現役時代にも敗れており、来季以降も第一関門となりそうだ。

創部史上初4連敗

うなだれる左・永住、右・大山

10/1 29−31 於・鶴見緑地球技場（大阪府）

第3節 対関大

最大15点差逃げ切れず

負けられない一戦で最大15点差を覆され、29—31で逆転負け。誰も予想だにしない結果に、スタンドからは大きなため息が漏れた。

開始9分、ラインアウトから速いサイクルでボールを展開。FWが連続攻撃を仕掛け、嘉納のパスを受け取った岩本が右大外に押さえる。中盤にも2トライを追加し、前半を終えた。

しかし、後半から流れが急変する。「自分たちのペナルティーで相手の強みを引き出してしまった」（嘉納）。キックオフから自陣での防戦を強いられ、ラインアウトモールで失点。同20分、27分にもゴールラインを破られ、1点差に迫られる。さらに残り5分にPGで3点を加えられ、窮地に追い込まれた。

最後まで必死にトライを目指すも思いは届かずAリーグ3連敗。多くの課題が露呈し、痛い敗戦に涙をのんだ。

同		関
3	T	1
2	G	1
0	P	0
19	前	7
1	T	3
1	G	3
1	P	1
10	後	24
29	計	31

第4節 対摂南大

後半ロスタイム、逆転を狙うPGを外した嘉納に駆け寄る選手たち

10/22 32−34 於・宝が池公園球技場（京都府）

宝が池のグラウンドに敗戦を告げる笛が響いた。113年の歴史を誇る伝統校に突きつけられたあまりにも厳しい現実。留学生を擁する摂南大への対策は万全なはずだった。

グラウンディングが認められず、攻めあぐねる時間が続いた後半。13点ビハインドの終盤に一度は息を吹き返した。同32分、敵陣でフェーズを重ね、嘉納がゴール中央へ。5分後にも岡野のビッグゲインから長島にボールが渡り、一時逆転に成功した。

しかし、悪夢のような信じ難い結末を迎える。不用意な反則からPGで32—34と再びリードを許したが、ラストワンプレーでスクラムを押し切りPGのチャンスを獲得する。だが、無情にも嘉納のキックはゴールポスト左へそれ、審判の旗は上がらない。「あの場面に他の14人は立てない」（芦塚）とかばい、仲間たちが駆け寄った。

「本当に簡単なミスが多かったと思う」（山本敦）。変えることのできない結果を受け止め、選手たちはただ下を向くしかなかった。

同		摂
2	T	4
1	G	2
2	P	0
18	前	24
2	T	1
2	G	1
0	P	1
14	後	10
32	計	34

究極の選択

2点を追う終了間際、ゴールから約45㍍の位置で反則を獲得した。PGを決めれば逆転だったが、「リスクがあった」と主将はタッチキックを選択。ラインアウトからのラストプレーに賭けたが実らなかった。

第5節 対天理大

「悪い流れを砕く」（岡野）。大学選手権出場へわずか数%の可能性を信じ、漆黒の壁に立ち向かった。

春には41—33で白星を飾り、過去の対戦成績から見れば相性は悪くない。しかし、開始早々に暗雲が立ち込めた。前半4分、NO8パトリック・ヴァカタ（天理大）にラック際を抜かれ先制点を与える。さらに7点を加えられ、同20分にも課題としているキック処理のミスが勃発。「ハイボールを取れず、空中戦で後手に回ってしまった」（橋野コーチ）。序盤から主導権を握られ、0—33と無得点で折り返した。

それでも「最後まで絶対に諦めるな」と指揮官に背中を押され、後半戦へ気持ちを切り替える。岡野のトライで客席は大いに湧き上がったが、これが最初で最後の得点。天理大に計9トライを献上し、5—59で惨敗した。

「ふがいない結果になってしまって申し訳ない」（寺北）。完膚なきまでに打ちのめされ、険しい表情を浮かべた。

黒衣軍団に力及ばず大量失点

試合後落胆する左・荒川駿、右・寺北

11/5 5−59 於・鶴見緑地球技場（大阪府）

同		天
0	T	5
0	G	4
0	P	0
0	前	33
1	T	4
0	G	3
0	P	0
5	後	26
5	計	59

天理大の鉄壁ディフェンスに苦戦し反撃の糸口をつかめない中、岡野がエースの威厳を示した。

後半5分、自陣22㍍付近でボールを受け取ると、ミスマッチを狙いラインブレーク。突破口を開き、歓声を浴びた。その2分後にはラストパスをもらい自らインゴールへ。この日唯一の得点を決め、「持ち味を出せた」と気を吐いた。

意地見せた

編集後記

第45代丸山組として発行する最後の紙面となった。歴代最強のラグビー班長になると誓い、突き進んだ1年間。勝負の世界の厳しさを肌で感じながらも、大好きなラグビーを追う青春は紛れもなく楽しかった。どんなに辛い日も快く取材に応じてくれた選手、スタッフの皆さん、本当にありがとうございました。レンズ越しに見る笑顔が私の原動力でした。

【勝部健人】

全敗回避狙う最終節

2023 ムロオ関西大学ラグビーAリーグ 関西の敵を討て 12/2 11:45 K.O. vs. 関学大 於・東大阪市花園ラグビー場第1グラウンド

喜びを分かち合う関学大の選手たち

◆関学大の予想布陣◆
1 黄　2 西村　3 安達
4 野矢　5 堤
6 兪　8 小林　7 田中
9 金築　10 齊藤
12 松本　13 冨岡
11 中　15 的場　14 山本
（大畑山岡監督）

◆過去10年の対戦成績◆

年	スコア	勝敗	年	スコア	勝敗
13	25—12	○	18	33—40	●
14	14—26	●	19	24—21	○
15	29—27	○	20	対戦なし	
16	45—17	○	21	68—0	○
17	14—21	●	22	34—38	●

関学大戦力分析

昨年の主力が多く残り、今秋は充実した戦力で飛躍を見せる。開幕4連勝を挙げ、すでに大学選手権出場が決定した。

総合力の高いメンバーがそろうが、中でも注目は春のU20日本代表にも選出されたNO8小林典大だ。185㌢・103㌔の強靭（きょうじん）な肉体を生かしたボールキャリーで防御網を切り裂く。一方のBKでは得点ランキング首位のSO齊藤綜馬に要警戒。ここまで15本のPGを決めるなど、キックに絶対的自信を持っている。

昨季の対戦ではスクラムの優劣が勝敗に結び付き、関学大が26点差の劣勢をはねのけ逆転した。今試合でもセットプレーが1つの鍵を握る。

初勝利を狙う紺グレと大学選手権へ弾みをつけたい朱紺。両者の今後を占う好ゲームに注目だ。

最下位が確定

第6節 対京産大

突進する上野

11/19 28−43 於・たけびしスタジアム京都

同		京
1	T	4
1	G	1
0	P	0
7	前	22
3	T	3
3	G	3
0	P	0
21	後	21
28	計	43

入れ替え戦回避へ白星が絶対条件だった。相手は全勝で勝ち進み、怒涛（どとう）の快進撃を見せる京産大。「とにかくやれることを全力でぶつける」（長島）と全身全霊を懸けて挑んだ。

キックオフから40秒でノーホイッスルトライを許すと、瞬く間に点差が開く。前半29分時点で4トライを追いかける展開となり、この時点で勝利は厳しくなった。

しかし同36分、山本敦が意地のトライを奪うと流れが傾き始めた。後半9分にもラインアウトモールから荒川駿がインゴールにねじ込む。以後もFW陣がセットプレーで奮闘し、後半は21—21の同点。「2週間準備してきたことがうまく出た」（山本敦）と手応えを口にした。

今節で関大が立命大を下し、同志社が負けたことで史上初のAリーグ最下位と2度目の入れ替え戦行きが確定。「全て私の責任」（宮本監督）と屈辱的な6連敗に顔をしかめた。

レイアウト　藤本　知優

国境越え世界で活躍

「当たり前の幸せを感じた」

◆2月15日～3月13日◆国際協力機構（JICA）青年海外協力隊派遣◆於・KIIT（カリンガ産業技術研究所）＝インド・オディシャ州◆熱血指導が全員を笑顔にした。ラグビー部員8人が今年2月中旬から約1カ月間、インドでラグビーの普及活動に従事。始業前と放課後の1日2回、現地学生の競技力向上に務めた。楕円球がつくり出したつながりは、文化や言葉の垣根を超えてどこまでも広がる。彼らが再認識したスポーツの魅力は、次世代の紺グレ戦士たちにも受け継がれていくだろう。

ラグビー×国際協力

起床 6:30～8:30 練習（世代別でグループ練習）／15:00～17:00 MTG（その日出た課題を共有）／就寝

肩を組む（前列左から）渡邊（経4）、野田（商4）、松井（理工4）、北平（法4）、（後列左から）秋山（文情3）、塩尻（法3）、岩下（経4）、（後ろに立つ）内田（政策4）

※写真は全て本局員が現地で撮影

熱意

楕円球の結ぶ交流は悠々と国境や言語の壁を超えた。国際協力機構の青年海外協力隊として部員8人を約1カ月間インドに派遣。ラグビーの競技力向上だけでなく、フェアプレーの精神や互いを敬う姿勢を説いた。

本格的な取り組みの始まりはコロナ禍が深刻化する前の2020年2月。21、22年は渡航を断念したが、今年は3年ぶりに行われた。約20人の応募者から選ばれたのは、岩下、内田、北平、野田、松井、渡邊、秋山、塩尻の8人。「小さい時からやってきたラグビーを通してインドの発展に貢献したい」（野田）などと、それぞれが異なる思いを胸に異国へ赴いた。

伝授

指導したのは東部・オディシャ州ブバネシュワールの教育機関KIITに属す子どもたち。4、5歳から高校生までの幅広い世代を対象とした。練習は始業前の朝6時半から8時半までと、放課後の15時から17時までの2部制で実施。それぞれが年齢や技術レベルの異なる現地学生を担当した。

「その場その場でいろいろな気付きがあった」と渡邊の発案で毎晩課題を共有。試行錯誤を重ね、日を追うごとにコーチングの質を向上させた。「最初はゲーム（試合形式の練習）が全てだったけれど、次第に基礎練習も良いなと感じてくれるようになった」（松井）。言葉や文化の違いがあれど、懸命にラグビーの楽しさを伝授。呼応するように生徒たちも熱心に練習へ取り組み、その姿勢が活動の原動力となった。

インドでは7人制が主流だ。競争意識の高い国民性からか、時には独り善がりなプレーも目立った。日頃から15人制を基本とする8人はそれを理解し、集団で競わせるトレーニングを積極的に実践。一体感を醸し出し、粘り強く組織プレーの重要性を伝えた。決して恵まれた環境でない彼らにとって（7人制で）オリンピアンになることが夢だ。「彼らは生活を懸けてひたむきにラグビーをしている。日本の環境にもっと感謝していくべきだと思った」（岩下）。当たり前の尊さを再認識し、新たな学びが常に刺激を与えた。

継承

かけがえのない経験をした8人は教えることの難しさを実感。純粋に競技と向き合う姿勢を思い返し、ラグビーへの情熱はますます高まった。

岩下、内田、渡邊の3人は来年2月にも後輩6人を引き連れ再派遣される。「人として成長できるように3人で引っ張っていきたい」（内田）。会得したことをチームや社会に還元し、スポーツの持つ魅力を世界中に広げていく。【丸山潤一郎】

長期隊員として尽力

本校ラグビー部OBの藤井氏は青年海外協力隊の長期隊員として約8カ月間インドラグビーの発展に尽力。学生8人の派遣も彼の存在なくしては実現されなかった。

「大学の時から海外に興味があった」。忙しい社会人生活を過ごす中でも、この好奇心は心にあり続けた。そんな時、同OBで交流が盛んだった向山昌利氏（商卒）の紹介でプログラムへの参加を決断。昨年11月から今夏まで現地スタッフと一緒に熱血指導を行った。

教育者として歩み出した第2の人生はまだ序章に過ぎない。現在は大学院で教員免許の取得に向け勉学に励む。「どんな形であれ、インドに行った経験を通じて指導していきたい」。貴重な財産を1人でも多くの人に伝えること。それこそが藤井氏の使命だ。

◀子どもたちと笑顔を見せる藤井氏

藤井元基（ふじい・もとき）1977年2月2日生まれ。1999年に同志社大学商学部を卒業し、同年にサントリーへ入団。現在は同志社大学大学院・総合政策科学研究科に所属している。

記者の眼

練習場に着くと子どもたちが駆け寄ってきた。「コーチ」と呼びながら私の名前を聞いてくる。すぐに打ち解け、距離が縮まった。

息が荒れるまで必死に楕円球を追いかける彼らの足元を見渡すと、はだしの生徒もいる。気温が30℃を超え日差しが照りつける中、水さえ持っていない。それが日常だった。

「ラグビーが好き」。言葉が違っても、設備や環境が違っても。その思いは共通だった。

世代の先頭ひた走る紺グレの若き才能

長島 ©JRFU

林 ©JRFU

大島 ©JRFU

◆長島幸汰（ながしま・こうた）2003年11月2日生まれ。京都成章高校出身。ポジションはHO。175㌢・101㌔。スポーツ健康科学部2年。

◆林　慶音（はやし・けいと）2003年6月5日生まれ。大阪桐蔭高校出身。ポジションはNO8。180㌢・102㌔。スポーツ健康科学部2年。

◆大島泰真（おおしま・たいしん）2003年7月14日生まれ。京都成章高校出身。ポジションはSO。170㌢・77㌔。スポーツ健康科学部2年。

◆6月24日～7月14日◆ワールドラグビーU20チャンピオンシップ

昨冬、奇跡の大学選手権出場を決めた対天理大戦で全ての得点をマークした最強軍団。長島、林、大島が日の丸を背負った。

今春にジュニア・ジャパンを経て、リーグワンへの登竜門でもあるU20日本代表に選出。昨年はコロナ禍の影響でかなわなかった海外遠征への憧れを抱き、新たなステージへ乗り出した。

しかし、行く道は平たんではなかった。「不本意ながら試合に出場できなかった」（大島）。のしかかる重圧と歯が立たない現実。東西の名門校から集った実力者との熾烈（しれつ）なメンバー争いにあえいだ。首脳陣へのアピールで徐々に出番をつかんだが、その先にも試練が待ち受けていた。「（相手は）後半の1番しんどい時間でも全員がアグレッシブだった」（長島）。要所での勝負強さや集中力、スピード感など各国代表選手との差が明るみに。それでも「低いプレーは日本の強み」（林）と弾丸のように低く突き刺さるタックルで対抗した。

最終戦のU20イタリア代表戦では3人そろって試合に出場。「世代の1番高いレベルで一緒にプレーできたことがうれしかった」（長島）。同じ紺グレジャージーをまとってきた彼らにとって、桜のエンブレムを胸にプレーした経験は代え難いものとなった。

紆余（うよ）曲折の約1カ月をたどってきたからこそ揺るぎない矜持（きょうじ）が芽生えている。「この3人で引っ張って、同志社を強くしていきたい」（林）。世界を見据える男たちが、戦場の最前線で立ちはだかる敵を打ち破る。

7人制で代表入り

◆2月25・26日◆HSBCワールドラグビーセブンズシリーズ2023◆ロサンゼルス大会

2月末にロサンゼルスで開催されたワールドラグビーセブンズシリーズ。岩本が日本代表に選出され、世界へ羽ばたく一歩を踏み出した。

「（選出は）正直全く想定していなかった」とまさに予想外の出来事だった。長きにわたってセブンズ日本代表の顔として活躍した橋野コーチの後押しも受けアメリカの地へ。当初はトレーニングメンバーとして遠征に参加したが、その後昇格を果たし代表入りした。

昨秋に1年生ながらジュニアリーグで頭角を現すと、大学選手権にもリザーブ登録。常翔学園時代から武器としてきたハイボールへの強さと運動量がトップチーム関係者の目に止まった。同じく選ばれたのは日本の第一線で活躍する社会人選手たち。「こんなメンバーの中で戦えるのかと不安が先に来た」。デビュー戦のオーストラリア代表戦でマッチアップした相手は身長190㌢前後の体格。初体験の連続に戸惑いを見せることもあった。それでも懸命にフィールドを駆け回った先に得たものは、プレーへの絶対的な自信。「社会人でもやれるのではないか」。指揮を執るサイモンHCから太鼓判を押され、今後のキャリアへ自信を抱かせた。

今季もAリーグ全試合に出場。常にフォア・ザ・チームの精神を徹底する岩本は、敗北を喫するたびに涙を流してきた。「批判している人たちを見返したい」。着実に力をつける若き侍の強い覚悟が停滞する紺グレを突き動かす。

岩本 ©JRFU

◆岩本総司（いわもと・そうじ）2003年7月24日生まれ。大阪府・常翔学園高校出身。ポジションはWTB。178㌢・85㌔。社会学部2年。

ヘッドライン過去紙面掲載
スマホ対応
同志社スポーツアトム official web site 編集局
ホームページはこちら

CO・OP 学生総合共済が部活を頑張っているあなたを応援します！
2022年度の同志社生協受付のスポーツ事故による給付は587件、2,457万円でした。
（同志社生協の学生総合共済のスポーツ事故による入通院・手術・固定具の延べ件数と金額）
給付申請をお忘れの方、これから加入される方は組合員センターで手続きできます！
CO・OP 学生総合共済給付事例一部抜粋（2023年9月）
ラグビーの練習中にタックルをした瞬間、背部を痛めて挫傷した。通院14日　給付金額28,000円
サッカーの練習中にグラウンドで、相手と接触し、右大腿部を挫傷した。通院32日　給付金額64,000円
同志社生活協同組合
今出川組合員センター（良心館地下1階）☎075－251－4430
京田辺組合員センター（日糧館1階）☎0774－65－8371
問合せ Mail doshisha.info@univ.coop

Instagram：atom_doshisha_

レイアウト　藤田　桃江

まるわかり RUGBY GUIDE

ラグビーワールドカップに日本中が熱狂した２０２３年。「興味を持ったけれど、まだルールがよく分からない…」。そんなあなたへ、競技の基本から豆知識までを分かりやすくご紹介。これを読めば今日から君もラグビーマスターだ！

HISTORY

1911 慶応、旧制三高に次ぎ日本で３番目に創部
- 1912 慶応との定期戦開始
- 1923 早稲田との定期戦開始
- 1925 明治との定期戦開始
- 1933 慶応に初勝利
- 1959 岡仁詩氏監督就任
- 1960 慶・早・明を初めて同時に破る

初 1961 第２回ＮＨＫ杯 初の日本一に輝く

1963 第１回日本選手権 日本一に輝く
- 1966 日本初のニュージーランド遠征
- 1973 部員が練習中に事故死 公式戦辞退
- 1980 第17回大学選手権 優勝
- 1982 第19回大学選手権 優勝
- 1983 第20回大学選手権 優勝

初 1984 第21回大学選手権 優勝 史上初の３連覇
- 1986 練習場を京田辺キャンパスに移す
- 1987 第24回大学選手権 準優勝
- 1988 ＡＬＬ同志社英国遠征

1992 1993 1995 関西大学ラグビー三冠完全優勝
- 2003 中尾見氏監督就任
- 2007 岡仁詩氏死去
- 2010 大学選手権出場逃す 初の入れ替え戦

2015 ６勝１敗ながら関西Ａリーグ優勝
- 2016 平尾誠二氏死去

2016 大学選手権で11年ぶりベスト４
- 2017 大学選手権出場逃す
- 2018 大学選手権出場逃す（史上初２年連続）
- 2020 大学選手権出場辞退（新型コロナの影響）
- 2021 第58回大学選手権 ベスト８（関西４位）
- 2022 第59回大学選手権 ベスト８（関西３位）

2023 史上初Ａリーグ全敗の危機

ラグビーの基本 1 魅力

１番の魅力はフィールドに立つ15人全員にスポットライトが当たるところだ。各ポジションの役割を全うし、勝利を手繰り寄せる。

両者がプライドをぶつけ合い、激しく衝突するタックル。陣取り合戦を繰り広げるキック。華麗なステップで相手を翻弄（ほんろう）するラン。個々の特徴を存分に生かした迫力満載なプレーが観客の目を引きつける。

何よりも欠かせないのは「One for all, All for one」の精神だ。味方のミスもみんなで引き受けカバーし合う。仲間への思いやりがプレーの細部に表れ、選手、指導者、ファンの絆が会場に一体感を生み出す。

一言では語れないほど奥深いラグビー。心を一つに突き進む戦士たちの勇姿を見逃すな。

ラグビーの基本 2 RULE

「危険なプレーをしない」、「常にボールを奪い合う」、「常に立った状態でプレー」、「常にボールが先頭」と４つの原則がある。

最大の特徴は反則行為が複雑で多い点だ。上記の原則に反するとペナルティーが科され、時には失点に直結することもある。程度によって試合再開方法は異なるが、軽いものは「スローフォワード」や「ノックオン」。重いものは、故意にスクラムやモールを崩す「コラプシング」、タックルで倒れた選手がボールを離さない「ノットリリースザボール」、相手の胸骨より上にタックルする「ハイタックル」などがある。危険なプレーや重い反則を繰り返すと特定の選手が10分間一時退場になるシンビン制度も存在。いかに反則の数を抑えられるかが勝敗の鍵を握る。

スローフォワード

ボールを前に投げる反則行為

ノックオン

ボールを前に落とす反則行為

ラグビーの基本 3 PLAY

15人ずつの選手からなる２つのチームが陣地を奪い合うラグビー。数あるスポーツの中でも、得点方法が４種類と多く、それぞれに点数が定められている。

花形のトライは「ゴールキックに挑戦する」という意味の「トライ・アット・ゴール」に由来する。相手のゴール領域内にボールを接地することで５点を獲得。その後、トライした位置の直線上から「コンバージョンキック」で２点の追加を狙える。

その他には「ペナルティーゴール（ＰＧ）」と「ドロップゴール（ＤＧ）」があり、それぞれ３点ずつ。ＰＧは地面に置いた状態で助走をつけて蹴る。それに対し、ＤＧはインプレー中に相手の隙を突き、地面にワンバウンドさせてからキックでゴールを狙う。

どの方法で得点を奪うか考えることもラグビーの醍醐味（だいごみ）の１つ。土壇場でどのような決断を下すか、ノーサイドの瞬間まで目が離せない。

スクラム

ノックオンなどの軽い反則でプレーが中断した際の試合再開方法。ＦＷ８人が押し合う。

ラインアウト

通称空中戦。両チームのＦＷが２列に並び、投げ入れられたボールを奪い合うこと。

ジャッカル

タックルで倒した相手選手が持つボールを奪い取り、ピンチをチャンスに変えるプレー。

モール

互いに立った状態で、固まりになり押し合う。得点源にもなり、２回止まるまで前進できる。

ラック

タックル成立後、両チームの選手が密集し地面にあるボールを取り合うこと。

POSITION TEST

あなたにぴったりのポジションを見つけよう！

START

- 目立ちたがり屋な性格だ → 実は体重が１００キロある → 「手足が長い」とよく言われる → A
- 身長は１８０センチ以上だ → B
- 鬼ごっこが得意だ → C
- 足の速さには自信がある → YES → サッカーではいつも大活躍だ → D
- 足の速さには自信がある → NO → いつでも落ち着いている → E
- 身長は１８０センチ以上だ → NO → F

ノーサイドの精神

試合が終了すれば勝った側も負けた側もない。激しいコンタクトスポーツだからこそ、ノーサイドの精神は世代を超えて受け継がれてきた。結果がどうであろうと真摯（しんし）に受け止め、互いの健闘をたたえ合う。まさに崇高なラグビー精神の表れだ。

観戦時のマナー

選手の緊張感と集中力を妨害しないため、ゴールキック時は静かにキッカーを見守るのがマナー。メガホンや太鼓などの音が鳴る応援グッズの使用も禁止だ。観客全員がルールを守って気持ち良く応援し、素晴らしいプレーには敵味方関係なく拍手を送ろう。

ジャージーの秘密

日本では「ラグビージャージー＝横しま」が風習だが、海外では単色が通例だ。これは日本ラグビーの草創期、強豪国にジャージーの色をほとんど使われた背景がある。色かぶり防止のためにやむなく横しまを採用し、今やこれが伝統になっている。（※諸説あり）

ポジション

A フロントロー PR HO
ＰＲはスクラムの柱となる縁の下の力持ち。ＨＯはパワーと器用さを兼備し、セットプレーを操る。

B セカンドロー LO
チーム１の大型選手。ラインアウトやキックオフで長身を生かし、高いボールをキャッチする。

C バックロー FL NO8
ＦＬはボール争奪戦の主役。ＮＯ８はＦＷを最後尾から支え、攻防の中心で的確な指示を送る。

D ハーフバック SH SO
ＳＨは判断力と俊敏性を持ち合わせる戦略家。ＳＯはチームの司令塔的存在で、攻撃の起点となる。

E スリークオーターバックス CTB WTB
ＣＴＢは接触プレーが武器の切り込み隊長。ＷＴＢはチーム１のスピードを持ち、トライを奪う。

F フルバック FB
正確無比なキックを持つ防御ラインの最後のとりで。攻撃にも参加し、責任感と大胆さを併せ持つ。

紺グレの軌跡

同志社の歴史は１９１１年にさかのぼる。日本で３番目に古いラグビー部として常に伝統を継承し、幾度となく壁を乗り越えてきた。

初めて日本一に輝いたのは61年のＮＨＫ杯。創部から50年の道のりだった。そして１１３年目を迎えた今でもファンの間で語り継がれるのは、やはり82～84年の大学選手権３連覇だ。ここで一気に名門として名をはせた紺グレ集団は無類の強さを発揮する。その代表格は「ミスター・ラグビー」と称される平尾誠二氏。さらには日本ラグビー界を席巻し、同志社ラグビーの遺伝子をつくり上げた岡仁詩氏の尽力が欠かせなかった。

黄金時代は過ぎ去り、時は２０２３年。優勝からは長く遠ざかり、チームは開幕から６連敗と低迷。全敗を覚悟し、入れ替え戦に回る窮地に立たされている。今こそ築き上げられてきた伝統と歴史を思い出し、何としてもこの暗闇を切り開かなければならない。

レイアウト　城山　歩美

同志社校友会

同志社設立１０年後の１８８５年に「アルムニ会」として発足したのが、同志社校友会の始まりです。国内４８支部、海外２４ヵ国３６支部に展開する同志社校友会。主な活動目的は、卒業生の親睦と大学との提携を通じた学生への支援です。現在、約３６万人を超える校友会員が全世界で活躍しています。

同志社校友会の活動
卒業生と繋がる　学生と繋がる　学生を支える

詳しくは同志社校友会 HP へ

同志社校友会事務局
〒602-0867 京都市上京区寺町通丸太町上る松陰町 140-4　新島会館
○京都市バス・京都バス 河原町丸太町下車 徒歩５分 ○京都市営地下鉄 丸太町下車 徒歩 10 分
電話：075-251-4393
MAIL：info00@doshisha-alumni.org

STAFF INTRODUCTION 2023

グラウンドで日々激しく体をぶつけ合う紺グレ戦士。その裏には黙々と業務をこなし、選手たちを支えるスタッフの存在がある。フィールドは違えど、共に戦う気持ちは同じ。スポットライトが当たることはないが、勝利を信じてがむしゃらに汗を流す縁の下の力持ちを紹介する。

01 宮本啓希

MIYAMOTO HIROKI

（みやもと・ひろき）１９８６年10月3日生まれ。２００９年に同志社大学商学部を卒業。同年にサントリーサンゴリアス（現・東京サントリーサンゴリアス）へ入団。２０１８年の現役引退後は、同チームでスタッフとして活躍した。昨年度から本校ラグビー部で監督を務める。

監督

挫折越え再興の礎築き上げる

08年第180号1面

「オレが国…」14年前の紺グレ時代

２年前、中尾副部長から監督就任の打診を受けた。当時は採用担当として何度か京田辺に足を運ぶ程度だったが、「力になれるならそんなに幸せなことはない」とオファーを承諾。

「行ってこい」と所属先からも快く送り出され、再び紺グレを背負う覚悟を決めた。

「チームのために、他の誰かのために」。つながりの重要性を説い続けてきた。「勝ち負けは結果。そこを目指した態度が１番大事」。時には私生活にも目を向け、規律の改善を促す。

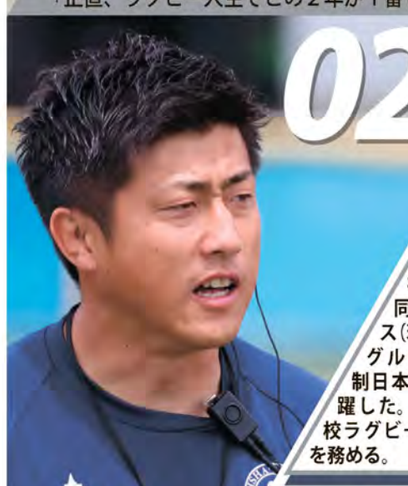
愛情に基づいた厳しさを持って未熟な学生と向き合っている。

「正直、ラグビー人生でこの２年が１番しんどい」。指導経験がなく手探りから始まったこの２年間は常に重圧と戦っている。昨年は「絶対にギャップがあった」と意思疎通に時間を要した。今季も結果が出ない中で最善を尽くし、「１番良いパフォーマンスを出してほしい」という一心で指揮を執る。

「座右の銘は『逆境は餌』。成功している人は逆境の時に前へ進む」。頭には下馬評を一蹴した昨年の最終節がよぎっている。内に秘めた情熱で、愛する母校を前に押し進めろ。

02 橋野皓介

HASHINO KOSUKE



（はしの・こうすけ）１９８７年11月20日生まれ。２０１０年に同志社大学社会学部を卒業。同年にキヤノンイーグルス（現・横浜キヤノンイーグルス）へ入団。７人制日本代表としても活躍した。昨年度から本校ラグビー部でコーチを務める。

ATコーチ（アタック）

恩返し胸に躍進

09年第186号5面

13年前の紺グレ時代

「同志社に恩返しがしたい」。大学を卒業してからも心の中には母校への思いがあった。その矢先、宮本監督から「一緒にやろう」と声が掛かり、願いは現実となる。

橋野は母校の古豪復活へ向けた改革に着手した。「自分の考えを押し付けても何の意味もない」。紺グレの神髄は我慢する受動的な時代から、自ら行動し成長させるものへ。

その中で、昨季からブレークダウンの強化を継続し、「（選手たちに）元々あるポテンシャルを引き出してあげたい」と指導に当たる。

「自分たちの形のラグビーをやり切りたい」。学生時代に味わった喜びが消えないからこそ人一倍強い思いを宿している。

負けが先行し苦境に立たされている今シーズン。「（選手たちが）やり切るための準備をコーチ陣がつくらないといけない」。強い同志社を継承していくため、揺るぎない覚悟を胸に重圧と向き合う。

03 今森甚

IMAMORI JIN

（いまもり・じん）１９８３年8月17日生まれ。２００６年に同志社大学商学部を卒業。同年に東京ガスへ入団。２０１７年の現役引退後は、同チームでスタッフとして活躍した。昨年度から本校ラグビー部でコーチを務める。

DFコーチ（ディフェンス）

防壁作る立役者

05年第162号3面

17年前の紺グレ時代

「宮本監督を支えつつ、強くて面白い同志社ラグビーができる選手たちを育てないといけない」。長年遠ざかっている日本一を狙うため、17年前の戦士・今森が立ち上がった。

主な仕事はディフェンスシステムの構築だ。昨シーズンは相手のアタックを待っていたが、今年から積極的に前へ上がる防御に変更。「前に出るディフェンスがはまった瞬間だった」と春の対天理大戦では何度も攻撃を封じ込め、新戦法が機能した。

選手たちとの対話も怠らない。20歳近く年が離れ、多様な志を持つ学生たちと真摯（しんし）に向き合う。強制的なルールを取り入れつつも、自主性を引き出した。

チームは開幕6連敗を喫し、重苦しい空気が漂う。「秋はここまでディフェンスがうまくいっていないので、もう一度前に出る姿勢を取りたい」。今森が築き上げてきた戦略が勝利の方程式となり、この現状を払拭する。

04 木越百美

KIGOSHI MOMOMI

力尽くし組織に献身

（きごし・ももみ）２００１年6月11日生まれ。大阪府・浪速高校出身。１５４ｾﾝﾁ。同志社女子大学４年。

マネジャー

迫力あるラグビーの魅力に取りつかれ、高校から続けてきたマネジャー生活は7年目に突入。日々行われる練習をひたむきに支えるチームに欠かせない存在だ。

主に担当しているのは会計作業。部費の請求や出費の整理など、その業務は多方面にわたる。また、持ち前の広い視野で部員を観察し、あらゆるサポートを行う「便利屋」としての努力もいとわない。

「試合に勝てる準備をする上で、自分たちのサポートが役に立てば良い」。ラグビー部での生活もラストスパート。紺グレの巻き返しを信じ、最後まで懸命に汗を流す。

05 吉田健作

YOSHIDA KENSAKU

（よしだ・けんさく）２００２年3月2日生まれ。大阪府・同志社香里高校出身。１７１ｾﾝﾁ・78ｷﾛ。法学部4年。

主務

噛闘で光探す柱石

常に組織のために足を動かし続けた。多岐にわたる業務に加え、清掃活動やキッズスクールの開催。「チームの力になりたい」と始めた新たな試みは数え切れない。

この1年間はいばらの道だった。

努力の成果が目に見えず、もがき苦しむ毎日。「１人でも（お礼を）言ってくれる人がいれば頑張ったかいがある」。何度も立ち上がる原動力になったのは、掛けられる感謝の言葉だった。主務の仕事は直接勝利に結び付くものではない。それでも古豪復活へ誰よりも強い覚悟で奔走した。

青春をささげたラグビー人生も残りわずか。「応援してくれる人に同志社が良いなと思ってもらえる姿を見せないといけない」。伝統校の歯車である限り、宿命を背負い任務を全うする。

06 川崎滉太

KAWASAKI KOTA

包容力で回復助ける

（かわさき・こうた）２００１年11月5日生まれ。大阪府・同志社香里高校出身。１６１ｾﾝﾁ・81ｷﾛ。スポーツ健康科学部4年。

トレーナー

自身の経験が後押しし、ストレングストレーナーの道を選択。強みと語る「カンガルーのような包容力」で多くの部員を救ってきた。

川崎の役割はトレーニングメニューの作成やけがのケア。丁寧なリハビリを通して、けがの予防に貢献している。メンバーが早期復帰できるように導くことも役割の１つだ。毎日のささいな会話の積み重ねがチームメートの本音を引き出す。細やかな気遣いは信頼へとつながり、必要不可欠な存在となった。

原動力は「ありがとう」の言葉。全員が最高のパフォーマンスを発揮するために、身体面だけでなく精神面でも支える。

07 嶋田一成

SHIMADA ISSEI

（しまだ・いっせい）２００１年6月29日生まれ。大阪府・同志社香里高校出身。１７１ｾﾝﾁ・73ｷﾛ。法学部4年。

アナリスト

分析力で窮状救え

慢性的に膝を痛めてきた影響により入部後数カ月でアナリストへの転向を決断。しかし、３歳から続けてきた競技への未練は簡単には消えなかった。

「大好きな同志社のために無理やり気持ちを切り替えた」。当初は慣れることで精一杯だったが４年を経て順応。今では周りに誇れるスタッフへと成長した。嶋田の専門はＦＷの分析。時には首脳陣の依頼に応えながら弱点や傾向を算出し、相手の隙を見逃さない。

「勝った時に監督と喜びを共有できるのが良いところ」。約20年に及ぶラグビー人生を笑顔で締めくくるためには白星が不可欠だ。ノーサイドの笛が吹かれる瞬間まで暗躍する。

08 松岡祐樹

MATSUOKA YUKI

個を生かし勝機呼ぶ

（まつおか・ゆうき）２００１年7月7日生まれ。大阪府・同志社香里高校出身。１７０ｾﾝﾁ・75ｷﾛ。経済学部4年。

学生コーチ

コルツチームの練習メニューを作成し、補助業務を行う。多忙な日々の裏で選手と指導陣との橋渡し役を担い、より良い環境づくりに力を入れた。表舞台に立つ仲間のように、脚光を浴びる機会はないかもしれない。それでも「自分が選手だった時よりもチームが勝つことにやりがいを感じる」と自身が輝ける場所を見つけた。

「自分たちがやることは決まっている」。受け継がれてきた伝統と誇りを次世代の紺グレ戦士へ。黄金時代とうたわれたあの時の栄光を思い描き、来シーズンに追い風を吹かせる。

09 児玉航之介

KODAMA KONOSUKE

（こだま・こうのすけ）２００２年12月6日生まれ。東京都・國學院久我山高校出身。１８３ｾﾝﾁ・87ｷﾛ。政策学部3年。

レフェリー

命運分ける笛を吹く

「信頼されるレフェリーになりたい」。この信念を貫き、グラウンドを駆け回る。

意識で防げる反則を注意するだけでなく、担当レフェリーの傾向を分析。対摂南大戦では反則を6個に抑え、勝敗を大きく分けるペナルティーの減少に貢献した。

「わざわざ映像を送ったり、質問に来てくれたりする選手を大切にしたい」。積極的な姿勢を見せる選手たちと切磋琢磨（せっさたくま）する日々。また、来シーズンからは主務を兼務し、過酷なスケジュールの中でも多くの仕事を全身全霊でやり抜く。

全ては勝利のため。懸命に戦う仲間と共に強い紺グレをつくり上げる。

10 高島菜々美

TAKASHIMA NANAMI

（たかしま・ななみ）２００２年3月1日生まれ。東京都・順天高校出身。１６０ｾﾝﾁ。スポーツ健康科学部4年。

美学生図鑑 体育会ver.47

心身癒す愛ある天使

小さい顔に手入れの行き届いた透明感のある肌、清純な笑顔。口元のほくろがかわいらしさを引き立て、一目見ただけで誰もがとりこになる。かつては野球部のマネジャーだった彼女を「推し」と称する部員が後を絶たなかった。

２０１９年のラグビーワールドカップをきっかけに、ラグビーの魅力に引かれる。以前からスポーツトレーナーを志していたこともあり、現在の道を選んだ。

「選手が１００％の力を出せるようにする」。日頃から周りの人たちのことを考えて行動し、わずかな変化も見逃さない。「頑張っている選手たちが報われてほしい」。愛にあふれる彼女の献身が、屈強な戦士たちを後押しする。

【金海彩夏】

レイアウト　林　康陽

私たちは同志社スポーツを応援しています

同志社スポーツユニオン
最高顧問
豊原 洋治
○1964年度法学部卒
○バドミントン部OB

同志社スポーツユニオン
会長
藤原 卓也
○1980年度商学部卒
○柔道部OB
不撓不屈の精神で健闘を祈ります！

同志社スポーツユニオン
副会長
中井 雅夫
○1977年度商学部卒
○カヌー部OB

同志社校友会愛知支部顧問
同志社スポーツユニオン東海支部長
同志社スポーツユニオン
副会長
小栗 成男
○1987年度商学部卒
○ゴルフ部OB・OG会長

同志社スポーツユニオン
理事長
佐野 聡伸
○1992年度商学部卒
○柔道部OB
必勝祈願！
卒業生皆の期待と希望をのせて底力を発揮ください！

関東スポーツユニオン
関東で待ってんで！

同志社ラグビークラブ理事
同志社スポーツユニオン
監事
近藤 千晴
○1989年度文学部卒
○ラグビー部OG

同志社ラグビークラブ
名誉会長
大西 一二
○1977年度商学部卒
○ラグビー部OB

同志社ラグビークラブ
理事長
小島 正也
○1989年度文学部卒
○ラグビー部OB

同志社ラグビークラブ
副理事長
井上 嗣浩
○1989年度経済学部卒
○ラグビー部OB

同志社大学政策学部総合政策科学研究科
教授
川井 圭司
○1992年度法学部卒
○ラグビー部OB

同志社大学体育会ラグビー部部長
同志社大学政策学部総合政策科学研究科
教授
川口 章

同志社大学商学部
太田原ゼミ一同
同志社スポーツを応援しています

同志社大学体育会弓道部
部長
小島 秀信

同志社
山中 俊哉
○1986年度経済学部卒
最後まで応援しています

大阪興産株式会社
代表取締役
西田 喜彦
目標に向い、栄冠を手に。

イールック・ソリューションズ株式会社
代表取締役
大橋 晃治

清鶴酒造株式会社
代表取締役
社長
石井 清祐
○2000年度文学部卒
○アメフト部OB

摂津富田　御料理・仕出し　岡嶋
岡島 秀行
○1973年度文学部卒

株式会社スポーツバックス
代表取締役
澤井 芳信
○2003年度文学部卒
○硬式野球部OB
冬は必ず春となる。頑張れ！

己を信じて突き進め
ご有志

雄々しく戦え
ご有志

意地見せてくれ
ご有志

絶対残留！
ご有志

逆境に打ち勝て
ご有志

レイアウト　城山　歩美

最終節連敗で4位転落
硬式野球部
無冠の秋

超克 DOSHISHA HEROES 2023 ～超えて越えて頂へ～

◆9月2日～10月21日◆令和5年度関西学生野球連盟秋季リーグ戦◆於・わかさスタジアム京都他

◆がむしゃらに走り抜けた1年が幕を閉じた。開幕カードを落とすも、3節連続で勝ち点を奪い2位で迎えた同立戦。だが、目前で関大に優勝を譲り、残された道は3季連続の宿敵撃破だけだった。第1戦は相手エース谷脇（立命大）に無安打無得点と歯が立たず敗戦。第2戦も1―2で惜しくも敗れ、リーグ4位に終わった。先代の思いを背負い、来季こそ優勝へ。川久保を主将とする新チームが始動し、栄光の扉を開く。

次世代へ思い託した

バットを構える松井（スポ4）

送球する川久保（スポ3）

中軸がタイトル争い演じる

松井が首位打者とベストナインの2冠、川久保もベストナインに輝き、下位に沈んだ中でも気を吐いた。

「結果的に（タイトルを）取れてすごくうれしい」（松井）。春に続いて4番の座を守り抜き、打線をけん引。26年ぶりとなる2季連続首位打者の快挙を成し遂げ、集大成を飾った。「来年は川久保に達成してほしい」（松井）。最終盤まで熾烈（しれつ）な争いを繰り広げた後輩に期待を寄せた。

川久保は不振にあえいだ春から一転、開幕から絶好調。「ここまで率が残っていたのは不思議」（川久保）と謙遜しながらも、幾度となく窮地を救った。来季は主将として責任ある立場に変わる。史上32人目のリーグ戦通算100安打まで残り41本に迫り、開幕から大暴れすることを誓った。

2021年秋の青地（スポ卒）から5季連続で首位打者を輩出。常連となったタイトルを継承すべく、下級生の台頭が期待される。

投打で苦戦

激動の1年に終止符が打たれた。「最後に何か後輩たちの目に見える形で、結果を残せなかったことが悔しい」（釜萢）。昨秋同様、関大に王座を譲り4位。最終節の対立命大戦の連敗が順位に響き、2季連続のBクラスに低迷した。

リーグ制覇だけを目指し挑んだ秋の陣だったが、開幕カードの対関大戦は投打で苦しんだ。第1戦はエース左腕金丸（関大）に完封負けを喫すると、第2戦も中盤に投手陣が崩れ敗北。これ以上負けが許されない状況に追い込まれ、早くも正念場を迎えた。しかし、「絶対に負けるわけにはいかない」（釜萢）と闘志に火を付ける。その後は7試合で6勝1敗。勝ち点3を獲得し、同立戦を残して優勝戦線へ舞い戻った。

悔い残した

「最後の同立戦も勝利で終えて、後輩たちに良い流れを引き継ぎたい」（釜萢）。第6節終了時点で関大に次ぐ2位に浮上。逆転優勝と史上初の同立戦6連勝に向け、わかさの地に乗り込んだ。だが、関大が関学大に勝利を挙げV逸が確定する。逆境からはい上がってきた戦士たちに訪れたやるせない結末。長年閉ざされてきた扉を再び開けることはできなかった。それでも「自分たちのやることは変わらない」（釜萢）と悔しさを押し殺し、伝統の一戦に全てを懸けた。

第1戦は両エースの投げ合いでゲームが開始するも、立命大の大黒柱・谷脇にノーヒットノーランを食らい0―2で敗れる。翌日の第2戦は、これまで陰で支えてきた4年生たちがメンバー入り。「後輩たちにプレーで思いを伝えたい」。全12選手が最後の力を振り絞り意地をぶつけるも、あと一歩届かず敗戦した。

昨秋に青地組から受け継いだ二塁側ベンチを譲るも、後輩たちへ無形の財産を継承。最上級生の姿を目に焼きつけ、下級生は来シーズン以降の雪辱を誓った。

新体制始動

「来年は本当に優勝できるチームをつくりたい」（花野監督）。リーグ戦の全日程を終え、釜萢組から川久保組へ世代交代。新体制が動き出した。

引退する4年生から託された願いは、12年間遠ざかっている「神宮出場」ただ一つ。先輩たちが4年間描き続けた夢舞台に向け、新たな物語が始まる。【山田和輝】

◆釜萢大司（かまやち・たいし）
2001年10月10日生まれ。北海道・札幌大谷高校出身。今年度硬式野球部の主将を務めた。右投げ左打ち。ポジションは内野手。171㌢・70㌔。経済学部4年。

悔しさをにじませる釜萢【切り込み写真】バットを振り抜く（撮影・藤本知優）

◆秋季リーグ戦順位表◆

順	大学名	勝点	勝	敗	勝率
①	関　大	5	10	1	0.909
②	近　大	3	6	4	0.600
③	立命大	3	7	5	0.583
④	同志社	3	6	5	0.545
⑤	関学大	1	4	8	0.333
⑥	京　大	0	0	10	0.000

下岡 学内新で優勝

ガッツポーズをする下岡

下岡仁美（しもおか・ひとみ）2002年2月26日生まれ。大阪府立泉陽高校出身。専門種目は100㍍W。1-6-1㌔。スポーツ健康科学部4年。

◆女子10000㍍W順位表◆

順	名前	大学名	タイム
①	下岡仁美	同志社	45:59.45
②	柳井綾音	立命大	46:50.70
③	内藤未唯	神奈川大	47:20.88
④	石田さつき	武庫川女大	48:07.27
⑤	山岸芽生	中京大	48:14.35

◆陸上競技部◆9月15日◆天皇賜盃第92回日本学生陸上競技対校選手権大会◆於・熊谷スポーツ文化公園陸上競技場（埼玉県）

競歩で45分59秒45をマーク。4年間の集大成となる大会で目標としていた表彰台、同志社記録更新を果たし、日本の頂に君臨した。

「最後のインカレの舞台を1番楽しんでやろう」とスタートから先頭でレースを引っ張る。中盤に入っても首位を維持し、自分のリズムで歩みを進めた。8000㍍付近から苦しさが見えるも、徐々に後続との差を広げる。「日本一のタイトルがもうすぐだと感じながら歩いてもペースを落とすことなく独歩。仲間の応援に後押しを受けながら、右手を突きあげゴールした。

「支えてくれた全ての人に感謝の気持ちでいっぱいになった」。陸上競技部に新たな歴史を刻む学内新記録を達成。表彰台で掛けられた金メダルは笑顔とともにひときわ輝きを放っていた。

ソフトボール部男子

◆9月30日～10月15日◆第55回秋季関西学生ソフトボールリーグ戦◆於・神戸学院大学第5グラウンド（兵庫県）他

今春に無傷で1部昇格を果たし、勢いそのままに臨んだ秋季リーグ戦で4位と成長を遂げた。

初戦は同点で迎えた最終回に満塁の好機をつくる。「チャンスで回ってきたから、負けたくないという気持ちで前に飛ばした」と鶴田（商3）が適時打を放ち、劇的なサヨナラ勝利を飾った。

2勝1分で迎えた最終日はダブルヘッダーが組まれた。「何度もピンチをつくったけれど、最小失点で投げられた」と高橋（商1）が疲労を見せながらも2試合を完投。しかし、打線はチャンスであと1本を欠く。14イニング無得点に終わり、優勝の可能性を残した中で連敗した。

「全試合無失点で抑えて優勝する」（高橋）。来シーズンは1部の頂点に君臨すべく、再出発を図る。

◆1部リーグ戦順位表◆

順	大学名	勝	敗	分
①	神戸学院大	3	0	2
②	京産大	3	1	1
③	立命大	3	2	0
④	同志社	2	2	1
⑤	大体大	1	4	0

バレーボール部男子

◆9月9日～10月22日◆2023年度関西大学バレーボール連盟男子1部秋季リーグ戦◆於・近畿大学東大阪キャンパス記念会館他

「優勝を狙えるチームになれたこと、持てる力を全部出し尽くして3位という好成績を残せたことは素直にうれしい」（宮坂・心理4）。宮坂組は関西の強豪が集うリーグ戦で春に続いて3位の結果を残した。

1次リーグ戦では「普段の練習の甘いところが露呈した」（宮坂）と悔しさをにじませる。2位通過で挑んだ上位リーグ戦では一転、初戦から宿敵立命大にフルセットの激闘を制す。その後2試合は敗北するも大産大、大体大にストレートの快勝を収め、7勝3敗で終幕した。

4年生が追い求めた関西制覇の夢は後輩たちに受け継がれた。引退する先輩たちの思いを胸に刻み、来年こそ歴史を塗り替えろ。

◆上位リーグ順戦位表◆

順	大学名	勝	敗	得点率
①	近　大	4	1	1.189
②	天理大	4	1	1.093
③	同志社	3	2	1.021
④	立命大	2	3	1.012
⑤	大産大	2	3	0.969
⑥	大体大	0	5	0.731

執念の6分半 全国3位
ボート部男子フォア

2000㍍をこぎ終えた選手たち

◆9月7～10日◆第50回全日本大学ローイング選手権大会◆於・戸田ボートコース（埼玉県）

日本一を目指した挑戦が終幕した。予選で敗れるも敗者復活戦、準決勝を勝ち上がりA決勝に進出。白熱した先頭争いを演じ、6分22秒24でフィニッシュした。昨年、男子エイトで43年ぶりの準優勝を成し遂げてから1年。今年は男子フォアで頂点を狙った。

決勝当日は多くのOBOGが応援に駆け付けた。レースはスタートから混戦を極め、一進一退を繰り返す。折り返しの1000㍍地点、トップとわずか0・7秒差の3番手につける。舵を取る福條（商4）の横には先行する立大、早大のストロークが横一線に並んだ。「優勝争いがすごく楽しくて、一番楽しいレースだった」（福條）。過酷なこぎ合いとなったがクルー全員で一心不乱に船を進めた。

激しい争いが続き、終盤に突入する。1500㍍地点では一時首位に立つも、ライバルたちも負けじと盛り返した。意地と意地がぶつかり合い、ラストスパートを仕掛けた他大学に先行を許す。そのまま3位でゴールし、1位の立大には1・3秒届かなかった。

最後のミーティング後、合宿所で共同生活を送った仲間に囲まれ福條は宙に舞った。主将としてボート競技をとことん追求した1年間。必死にもがき、苦しんでつかんだ銅メダルは努力の結晶だった。

◆男子舵手なしフォアA決勝順位表◆

順	大学名	タイム
①	立　大	6:20.94
②	早　大	6:21.03
③	同志社	6:22.24
④	日　大	6:33.12

バドミントン部女子

◆10月9～11日◆第74回全日本学生バドミントン選手権大会◆於・パロマ瑞穂アリーナ（愛知県）他

強豪校がそろう全国の地で若手コンビが躍動した。

勝てばベスト8進出が決まる重要な一戦。東（商2）・田中（スポ1）ペアは、日大の石井・山浦ペア相手に第1セットを奪われるも、その後はすぐに安定感を取り戻した。第2セットは抜群のコンビネーションで終始ゲームをコントロールし、危なげなくセットを奪取。「自分たちの思うようにプレーできた」（東）と第3セットでも連続ポイントでリードを広げ、21―13で快勝した。だが、続く準々決勝の対龍谷大戦ではストレート負け。実力差を痛感し、無念の敗退となった。

それでも、学年の垣根を超えた東・田中ペアは全国ベスト8の好成績を収めた。「次の大会に向けて一から頑張りたい」（東）。今大会で得た自信と課題を糧に、来春は中核として宿敵を斬る。

◆4回戦試合結果◆
東・田中ペア 2（13-21, 21-14, 21-13）1 石井・山浦ペア

その他結果

◆アイスホッケー部
・9月16日～10月28日
関西大学たかつきアイスアリーナ（大阪府）他
２０２３年度第70回関西学生アイスホッケーリーグ戦
1部リーグ　3位
◆アーチェリー部男子
・8月22日・23日
服部緑地陸上競技場特設レンジ（大阪府）
第63回関西学生アーチェリーターゲット選手権大会
〈リカーブ部門〉
鷲津大翔（商2）　4位
〈コンパウンド部門〉
畑本晃佑（商4）　優勝
岡山耕平（心理4）4位
◆空手道部
・9月3日
近畿大学記念会館（大阪府）
第64回全関西大学空手道選手権大会
〈男子団体形〉優勝
〈女子団体形〉優勝
〈女子団体組手〉　3位
・11月19日
日本武道館（東京都）
第67回全日本大学空手道選手権大会
〈女子団体形〉　2位
〈男子団体形〉　3位
◆準硬式野球部
・9月14日～10月20日
ベイコム野球場（兵庫県）他
令和5年度関西六大学準硬式野球連盟秋季リーグ戦
3位
◆ソフトテニス部
・9月23・24日
三段池公園テニスコート（京都府）
２０２３年度関西学生ソフトテニス秋季リーグ戦
〈男子〉　1部リーグ3位
〈女子〉　1部リーグ3位
◆体操競技部
・8月25・26日
高崎アリーナ（群馬県）
第75回全日本学生新体操選手権大会
東本侑也（スポ3）　6位
・10月27～29日
武蔵野の森総合スポーツプラザ（東京都）
第76回全日本新体操選手権大会
東本侑也
〈男子個人総合〉優勝
〈男子個人種目別〉ロープ　4位
スティック　3位
リング　4位
クラブ　優勝
◆卓球部
・8月28日～9月7日
ベイコム総合体育館（兵庫県）他
令和5年度関西学生秋季卓球リーグ戦
〈男子〉1部　3位
〈女子〉1部　準優勝
◆馬術部
・11月2・3日
三木ホースランドパーク（兵庫県）
第73回全日本学生賞典障害馬術大会
泉和華子（社2）　3位
◆バドミントン部女子
・9月11日～9月15日
和歌山県立橋本体育館
令和5年度関西学生バドミントン秋季リーグ戦
準優勝
◆フィギュアスケート部
・10月22日
木下カンセーアイスアリーナ（滋賀県）
第17回西日本学生フィギュアスケート選手権大会
〈男子7・8級〉森口澄士（商4）2位
・10月27・28日
ひろしんビッグウェーブ（広島県）
第49回西日本選手権
〈男子〉本田ルーカス剛史（スポ3）7位
・10月28・29日
ひろしんビッグウェーブ（広島県）
第92回全日本選手権大会アイスダンス予選会
吉田唄菜・森田真沙也（商2）優勝
◆フェンシング部
・10月18日～22日
大山崎町体育館（京都府）
令和5年度第73回関西学生フェンシング選手権大会
〈男子個人フルーレ〉
大野（商3）　準優勝
〈女子個人サーブル〉
小山（法4）　準優勝
〈男子団体フルーレ〉　準優勝
◆フットサル部
・10月29日・11月19日
宮津市民体育館（京都府）他
ＪＦＡ第29回全日本フットサル選手権大会京都府大会
準優勝
◆ボウリング部
・9月10日～11月12日
キョーイチアミューズメントパーク吉祥院（京都府）他
第62回関西学生秋季リーグ戦
〈男子〉　優勝
〈女子〉　優勝
◆ボードセイリング部
・11月15日～17日
沖縄県国頭村字奥間海岸（オクマプライベートビーチ＆リゾート）
２０２３全日本学生ボードセーリング選手権大会
齋藤雄悟（政策3）　3位
藤原海（商4）　6位
◆ヨット部
・11月2日～5日
福岡市ヨットハーバー
第88回全日本学生ヨット選手権大会
〈470級〉　3位
〈スナイプ級〉　準優勝
〈総合〉準優勝
◆ラクロス部男子
・8月12日～11月4日
鶴見緑地スタジアム（大阪府）他
第33回関西学生ラクロスリーグ戦
準優勝
◆ラクロス部女子
・8月11日～11月4日
鶴見緑地スタジアム（大阪府）他
第33回関西学生ラクロスリーグ戦
準優勝
◆レスリング部
・9月29日～10月1日
堺市金岡公園体育館（大阪府）
２０２３年西日本学生選手権
〈F57㌔級〉志村宗（商3）　3位
〈G87㌔級〉内田柊二（商2）3位
・11月19・20日
堺市金岡公園体育館（大阪府）
２０２３年内閣総理大臣杯全日本大学選手権
〈F92㌔級〉飯沼啓将（商4）3位

レイアウト　木田　恋菜

カヌー部 全国制覇

ゴール後ガッツポーズをする左・岩井と右・齋藤【切り込み写真】賞状を持つ

「これからの同志社は俺たちが背負っていく」（岩井）

◆岩井壮太（いわい・そうた）2004年3月26日生まれ。滋賀県立八幡商業高校出身。171㌢・72㌔。スポーツ健康科学部2年。

◆齋藤哲一（さいとう・てつひと）2003年7月16日生まれ。島根中央高校出身。162㌢・68㌔。スポーツ健康科学部2年。

◆8月25～27日◆第59回全日本学生カヌースプリント選手権大会◆於・海の森水上競技場（東京都）◆岩井と齋藤が連覇へのスタートラインに立った。全国の舞台で激戦を繰り広げ、悲願の日本一を達成。己の課題と真摯（しんし）に向き合い、格段とたくましくなった姿を見せた。予選は息の合ったこぎで1位通過を果たし、自信を胸に決勝戦へ挑んだ。序盤から持ち前の瞬発力で、後続を引き離す。1年間積み上げてきた正確なパドルさばきで最後までトップを守り抜いた。闘志満々な若手コンビが同志社の黄金時代を築き上げる。

晴れ舞台へ

努力が結実した瞬間だった。岩井と齋藤がK―2・200㍍で熱戦を制し、全国の頂点に君臨。「思い切りガッツポーズしていた」（齋藤）とレース後、互いに手を握りたたえ合った。

彼らが歩んできた道のりは決して順風満帆ではなかった。昨年、4年生とペアを組んだ齋藤は8位、岩井も準決勝敗退と不本意な結果に終わる。悔しさを原動力に鍛錬を積み重ねてきた1年間。強い思いを胸に死闘を繰り広げた。

成長遂げた

晴天に恵まれ、ベストコンディションでスタートラインに立った。圧倒的な実力を顕示し、予選を1位で通過。準決勝を挟まず決勝戦への切符を手に入れたことに「うれしかったし自信になった」と齋藤は振り返る。最も波の影響が少ないチャンピオンレーンを獲得し、有利な条件でファイナルへ立ち向かった。

号砲とともに各校の応援歌が会場に響き渡る。持ち前の瞬発力でスタートダッシュを決め、どの艇よりも早くトップスピードに乗った。前方の岩井が先陣を切り、後方の齋藤が後ろから押し上げる。鍛え上げた肉体で推進力を高め、パドルで激しく水をたたいた。

中盤に突入してもペースを落とすことはなかった。歯を食いしばりながらラストスパートをかけ、他大学の猛追を振り切り1着でフィニッシュ。「自分たちが持っている力を全部注いだ」（岩井）。勝利を確信した2人は雄たけびを上げ、拳を高々と突きあげる。「全ての思いが込み上げてきた」（齋藤）。重圧をもろともしないこぎで栄冠に輝き、駆け寄った仲間から手荒い祝福を受けた。「信じ合えて良かった。ありがとう」と笑顔で感謝の言葉を交わした。

先代に並べ

「練習中はバランスを崩すことが多かった」（齋藤）。ペア競技は息を合わせることでパワーを最大化できる。「すぐに結果が出ない」（岩井）と思い悩んだ。試行錯誤を重ね、築き上げた絆が全国制覇の礎となったに違いない。

6年前、同種目で連覇を成し遂げた同志社カヌー部。インカレでレベルアップした姿を見せた2人は、先代の記録に並ぶべく闘志を燃やしている。齋藤は「中間の伸びを重点的に練習していきたい」と見つかった課題を改善し、さらなる飛躍を誓った。「これからの同志社は俺たちが背負っていく」（岩井）。2年生同士の最強ペアが連覇への道を歩む。【湊結子】

K―2・200㍍とは

カヌーにはカヤックとカナディアンの2種類があり、Kはカヤック競技を指す。パドルは両端にブレード（羽根）が付いたものを使用。K―2では2人でパドルをこぎ、着順を競い合う。

◆K―2・200㍍順位表◆

順	名前	大学名	タイム
①	齋藤・岩井	同志社	35.092
②	設楽・小野	立命大	35.161
③	阿部・行田	鹿屋体大	35.479
④	中田・山崎	立命大	36.168
⑤	久保山・大瀬	関学大	36.338

新戦力加わるも頂点逃した

武庫川女大の4連覇を阻むべく臨んだ女子K―4・500㍍ファイナル。僅差で敗れた昨年の悔しさをばねに若手主体のチームで構成するも、また2位で幕を閉じた。

観客からの熱い視線が会場を集まる中、レースは始まった。持ち前のスタートで勢いよく飛び出し流れに乗ろうとしたが、後半にかけてペースが上がらない。「練習では中間から最後のこぎが課題だった。本番でもその課題が見えてしまった」（渡辺・スポ3）。全員が息の合ったパドリングを心掛けるも、3秒差で王者に及ばなかった。

総力を挙げて果敢に挑むも王座を逃し悔しさをにじませた。「次はぶっちぎりで1位を取りたい」（橋本・社1）。正念場で実力を発揮し、来年こそ頂に着艇せよ。

軟式野球部

◆9月6日～10月3日◆2023年度関西六大学軟式野球連盟秋季リーグ戦◆於・寝屋川公園第一野球場（大阪府）他

中村豊組の物語が完結した。無敗のまま、6戦目で首位攻防の大一番、対立命大戦を迎える。先発成尾（スポ2）が5回途中3安打無失点と踏ん張るも、2番手で登板した吉岡（GR3）が6回に3点本塁打を被弾。スコアボードに0を刻んでいただけに、悔やんでも悔やみきれない一球となった。打線の反撃もむなしく3―6で敗北し、自力優勝が消滅。それでも最終戦を白星で締めくくり、リーグ2位で戦いを終えた。

「勝利へのこだわりは一層強くなった1年だった」（中村豊・社3）。共に戦ってきた3年生は今大会をもって引退。全身全霊で駆け抜けてきた大学野球に終わりを告げ、全国制覇の夢を島田組が受け継いだ。

◆秋季リーグ戦順位表◆

順	大学名	勝	敗	分	勝率
①	立命大	8	0	2	1.000
②	同志社	6	3	1	0.667
③	関　大	5	3	2	0.625
④	公立大	4	6	0	0.400
⑤	関学大	2	7	1	0.222
⑥	甲南大	2	8	0	0.200

ソフトボール部

◆9月16日～10月7日◆第54回秋季関西学生ソフトボールリーグ戦◆於・園田学園女子大学グラウンド（兵庫県）他

鈴木組が新体制初の秋季リーグ戦で準優勝に輝いた。

園田学園女大との最終戦。勝てば優勝が決まる一戦にチーム一丸で挑んだ。序盤は投手戦で進むも4回に試合が動く。先発の櫻田（スポ2）が突如崩れると打者一巡の猛攻を浴び、この回一挙5点を奪われた。その裏に生駒（スポ3）の適時打で一矢報いるも、反撃及ばず1―6で敗北。強豪校を前に苦杯をなめ、栄冠を逃した。

「課題はあるが、新体制が始まって間もない中で準優勝できて良かった」（鈴木・社3）。他大学は4年生が残る中、新体制で戦った同志社。リーグ内でも引けを取らない強さを見せ、自信を深めた。

次なる目標は来夏のインカレベスト4。よりたくましくなった姿でグラウンドに戻ってくる。

◆秋季リーグ戦績◆

日付	対戦相手	スコア
9.16	武庫川女大	1○0
9.17	大阪青山大	2○1
9.23	太成学院大	5○4
9.24	大阪国際大	2○1
9.30	関　大	1○0
10.1	大阪大谷大	0●3
10.7	園田学園女大	1●6

洋弓部男子 全日本W入賞

経験生かし新たな舞台で本領発揮

左・行射をする畑本、右・ガッツポーズをする岡山【切り込み写真】喜びを見せる

◆9月23・24日◆第61回全日本学生アーチェリー個人選手権大会◆於・夢の島公園アーチェリー場（東京都）

コンパウンド部門で畑本が全国2位、岡山が3位と好成績を残した。

両者、予選を勝ち抜き臨んだ決勝ラウンド。畑本は一進一退の攻防を繰り広げる中、一度もリードを譲らず、優勝決定戦に進んだ。「全力でぶつかりにいく」（畑本）。1セット目から同点になると、終盤に崩れ無念の敗退となった。

一方、強敵と対峙（たいじ）した岡山は接戦を演じるも132―136で敗退。3位決定戦では3セット連続で1点差と白熱した展開となった。4セット目に、相手が大きく外し一歩リードする。その後、逃げ切りに成功し、3位の座を手にした。

滑車の働きを利用し、リカーブより小さい力で弓を引けるコンパウンド。4年生コンビは転向して間もない中で入賞を成し遂げた。「インカレインドアで、絶対に優勝する」（岡山）。躍進を続ける彼らは、日本一を目指し次のステージでも的を射る。

岡山耕平

（おかやま・こうへい）2002年2月18日生まれ。奈良学園高校出身。168㌢・60㌔。心理学部4年。

畑本晃佑

（はたもと・こうすけ）2001年4月10日生まれ。兵庫県・甲南高校出身。162㌢・55㌔。商学部4年。

◆男子コンパウンド最終順位表◆

順	名前	大学名
①	伴拓磨	東京国際大
②	畑本晃佑	同志社
③	岡山耕平	同志社
④	齊藤玖哉	近　大

水泳部 日本一死守 400㍍個メ 梶本

華麗な泳ぎを見せる梶本

◆8月31日◆第99回日本学生選手権水泳競技大会◆於・東京アクアティクスセンター

梶本が昨年に続き日本一を達成した。世界を股に掛ける日本屈指の精鋭が集う全日本インカレ。大学水泳界で注目を浴び、人一倍重圧のかかる大会だったが、王者の意地と培った持久力を顕示した。

「初日なのでチームに勢いをつけるためにも重要なレース」と気を引き締めて出場した400㍍個人メドレー。予選を難なく通過し、決勝への切符を得た。バタフライでは2位につける好スタートを切る。しかし、その後は熾烈（しれつ）を極める厳しいレース展開になった。トップとの差を縮めるどころか、得意種目の自由形を目前にして暫定4位まで順位を下げた。

それでも前年王者のプライドで必死に水をかき分ける。残り50㍍地点、持ち前のスピードと力強いプルで2位に再浮上。「連覇する権利は私にしかない」。強い気持ちで先頭を猛追し、タッチ差で王座を死守した。前回大会のタイムを0秒28上回る4分40秒02を記録。再び栄光をつかんだ。

「将来的なことは考えず、今は目の前にあるパリオリンピックを目指している」。世界で通用する泳ぎを磨き上げ、新たな伝説をつくる。

◆女子400㍍個人メドレー順位表◆

順	名前	大学名	タイム
①	梶本	同志社	4:40.02
②	谷川近	大	4:40.29
③	杉山	神奈川大	4:41.42
④	佐藤	青学大	4:42.01
⑤	庄司法	大	4:47.16

◆梶本一花（かじもと・いちか）2004年3月7日生まれ。大阪府・四條畷学園高校出身。165㌢。スポーツ健康科学部2年。

「連覇する権利は私にしかない」

レスリング部

◆10月1日◆令和5年度西日本学生レスリング選手権大会◆於・堺市金岡公園体育館（大阪府）

国体で3位に入った中川（商2）が西日本インカレで優勝を果たした。

直前に足を負傷し万全ではなかった今大会。初戦は終了間際にバックを取られ、窮地に陥るも粘り勝ち。決勝戦では消極的な攻めから注意を受け、アクティビティーピリオドが始まった。攻勢に転じると、相手をマット上に投げ倒し、ビッグポイントを獲得。前半戦を5ポイントリードで折り返した。後半戦は失点こそしたが、果敢な攻めで2ポイントを追加。7―2で頂点に輝いた。

「次は天皇杯。自分のスタイルを見直し、1試合でも多く勝つ」。この結果は通過点に過ぎない。日々おごることなくマットに向かい、夢の舞台で真価を証明する。

◆女子55㌔級戦績◆

試合	相手	大学名	結果
準決勝	内野葉流	南九州大	6―4
決　勝	平戸紅葉	南九州大	7―2

レイアウト　白川　愛梨

紙器用板紙全般
大和板紙株式会社
DAIWA ITAGAMI
代表取締役社長
北村貴則
（平成5年度商学部卒業）
本社工場　〒582-0004 大阪府柏原市河原町5-32
電話　柏原（0729）71-1445 代表
FAX（0729）71-1449

スポーツ健康科学部
教員父母連絡会
スポーツ健康科学部生の
益々の活躍を期待いたします！

同志社田辺キャンパスから約3分！
同志社女子大
駅前申込所
JR同志社前駅
同志社大学
送迎バス毎時3便
三山木駅
当校
山城田辺自動車学校
京都府京田辺市普賢寺中島4-9　TEL 0774-63-6600

定期購読受付中!!
年間購読料￥2000▼お申込みはこちらから▼
https://doshisha-atom.net/subscribe/
〒602―8280
京都市上京区上立売新町西入ル西大路町61―1
同志社スポーツアトム編集局

「帝京大倒して日本一」は何処へ…

同志社アトム 本紙ラグビー班徹底解剖

自信喪失

今冬60回の節目を迎える大学選手権に同志社の名はない。全国優勝4回、関西最多48度のリーグ制覇を誇る名門に訪れた暗黒期。史上初の最下位が決まり、赤恥と言える2部との入れ替え戦に挑む。長年応援してきたファンからは「人材の墓場」と厳しい声も上がった。昨年の主力選手が多く残る今季、成績不振に陥った理由とは。1年間密着してきた本紙ラグビー班が徹底解剖し、多方面から敗因分析を試みた。

敗因分析

9月17日 対立命大	7-35		9月24日 対近大	17-31		10月1日 対関大	29-31	
同志社	項目	立命大	同志社	項目	近大	同志社	項目	関大
11/12	スクラム	9/10	5/5	スクラム	6/7	10/12	スクラム	4/4
5/9	ラインアウト	9/12	9/10	ラインアウト	10/14	6/12	ラインアウト	12/13
16	ハンドリングエラー	14	9	ハンドリングエラー	10	8	ハンドリングエラー	14
2	B.Dターンオーバー	5	2	B.Dターンオーバー	6	3	B.Dターンオーバー	3
10	ペナルティー	9	16	ペナルティー	11	14	ペナルティー	11

10月22日 対摂南大	32-34		11月5日 対天理大	5-59		11月19日 対京産大	28-43	
同志社	項目	摂南大	同志社	項目	天理大	同志社	項目	京産大
10/10	スクラム	2/6	4/6	スクラム	8/8	3/3	スクラム	2/4
13/13	ラインアウト	4/6	5/7	ラインアウト	16/16	16/19	ラインアウト	12/15
13	ハンドリングエラー	9	10	ハンドリングエラー	14	9	ハンドリングエラー	7
0	B.Dターンオーバー	7	3	B.Dターンオーバー	3	0	B.Dターンオーバー	3
6	ペナルティー	12	15	ペナルティー	9	8	ペナルティー	13

※ペナルティーの数はアドバンテージが適用されたものも含む

対天理大戦で敗れ絶望する選手たち

ブレークダウン
決定力不足
基本の欠如
ルール改訂
キック処理
ペナルティー

2度目の入れ替え戦決定

厳格化足かせに

ルール改訂が目指していた防御の大きな足かせとなった。

今年6月、日本ラグビー協会はハイタックルの基準を従来の「肩より上」から「胸骨の位置より上」にする試験的導入を発表。主な目的は脳振とうのリスク低減で、今秋から正式に運用されている。

これにより、オフシーズンから徹底してきた1人目が足首に入り、2人目がボールを殺すダブルタックルが難しくなった。第6節終了時点で反則扱いになったハイタックルは計13回。ビデオ判定がない学生レベルではレフェリーの裁量が大きく、「選手がパニックになっている」(宮本監督)と対応し切れなかった。

史上5回目 選手権逃す

※リーグ戦を出場辞退した1973年を除き、今年は史上5度目の大学選手権不出場となった。

▶3勝4敗 7位 2010年
▶2勝5敗 6位 2012年
▶3勝4敗 6位 2017年
▶4勝3敗 5位 2018年

同志社大学		VS	天理大学	
2ND	1ST		1ST	2ND
1	0	T	5	4
0	0	G	4	3
0	0	P.T	0	0
0	0	P.G	0	0
0	0	D.G	0	0
5		TOTAL	59	

大学選手権出場が消滅した対天理大戦のスコア

戦術面

戦い方を見ても課題は明白だった。ボールを保持した昨年から今季は戦術を一変。キックから堅守速攻を狙う形を選んだ。この変更は攻撃の時間が減ることを意味し、少ない好機でトライを取り切る決定力が求められた。しかし、ふたを開ければ個々のつながりが希薄でテンポが上がらない。何度もボールに絡まれ攻撃権を失った。橋野コーチも「1番大事なブレークダウンをおろそかにしてしまったことが失速の原因」と指摘した。

肝心のディフェンスでも脆弱(ぜいじゃく)さを露呈し続けた。重要度が増した1人目のタックルはことごとく外される。ゲインラインを切られた挙げ句、失点の起点になる反則を連発した。第2節では今秋最多のペナルティー16回を記録し、4本のPG(ペナルティーゴール)が敗因に直結。第3節、第4節でもPGが決勝点となり、接戦を落とした。

未来へ

「形がないのが同志社ラグビー」(故・岡仁詩元監督)。半世紀前から毎年選手の個性と状況に合わせ、最適解を導き出す考え方は現在にも受け継がれる。昨年は攻撃、今年は守備と重点を置く部分は違えど、神髄は変わらない。

指揮官は話す。「スキル以前の土台づくりが大切。肝の部分を抜いてしまうと絶対に勝てない」。暗黒期脱却の鍵は基礎を徹底的に固め、秋まで成長曲線を描けるチームづくりをすること。古豪の復活を誰もが待ち望んでいる。【勝部健人】

光と影

成功体験に固執してしまったのだろうか。昨年は終盤から学生主体のチームづくりに着手し、最終節では奇跡の逆転劇を起こした。「悔しい思いをした分、学ぶことが多く教訓になった」(山本敦)。今季も練習メニューから試合ごとの戦い方まで、リーダー陣を中心に考案。個人が弱点を分析する文化が植え付けられ、意見交換の機会は増えた。

改革は正しい方向に進んでいるように見えた。春は立命大、天理大を破るなど関西のライバルを撃破。だが、夏以降は後退の一途をたどる。「イレギュラーな状況に対応するスキルが足りなかった」(山本敦)とシーズンを戦い抜く基盤が欠如していた。攻撃は春から変化が少なく手を打たれ、ゴールラインが遠い。強化してきた防御でも徹底的に弱点を突かれ、簡単にトライを取られる。武器を見失った選手たちの表情は「自信喪失」に限りなく近かった。

◆同志社直近10年間の成績◆

年	平均得点	平均失点	関西	選手権
14	33	23.7	3位	2nd敗退
15	32.1	20.9	1位	2nd敗退
16	45.6	20.4	2位	ベスト4
17	28.9	29.3	6位	
18	28.4	31.4	5位	
19	34.9	31.3	2位	3回戦敗退
20	39	30.8	2位	出場辞退
21	40.6	14.3	4位	ベスト8
22	24.7	25.4	3位	ベスト8
23	19.7	38.8	8位	

▲データから見る今年の紺グレ
平均得点、平均失点はともに過去10年間でワーストを記録。拙攻と拙守が顕著に表れた年だった。
(※23年は第6節終了時点)

夏炉冬扇

成功体験に固執してしまったのだろうか。昨年は終盤から学生主体のチームづくりに着手し、最終節では奇跡の逆転劇を起こした。「悔しい思いをした分、学ぶことが多く教訓になった」(山本敦)。今季も練習メニューから試合ごとの戦い方まで、リーダー陣を中心に考案。個人が弱点を分析する文化が植え付けられ、意見交換の機会は増えた。

改革は正しい方向に進んでいるように見えた。春は立命大、天理大を破るなど関西のライバルを撃破。だが、夏以降は後退の一途をたどる。「イレギュラーな状況に対応するスキルが足りなかった」(山本敦)とシーズンを戦い抜く基盤が欠如していた。攻撃は春から変化が少なく手を打たれ、ゴールラインが遠い。強化してきた防御でも徹底的に弱点を突かれ、簡単にトライを取られる。武器を見失った選手たちの表情は「自信喪失」に限りなく近かった。

▼「努力は必ず報われる」とは決して思わない。たとえどれだけ多くの時間を費やし、正しいステップを踏んでいたとしても。結果が出なければ、まるでそれまでの過程が間違っていたかのように思われ、疑心暗鬼になる▼大学選手権優勝4回を誇る本校ラグビー部はどん底にいる。創部113年目にして史上初の最下位。大学選手権出場はおろか、入れ替え戦を控えている▼世の中うまくいくことばかりではない。大抵は思い描いたものとは異なり、誰もが「こんなはずじゃなかった」と歩んできた道のりを振り返る。学生記者として過ごした3年間も同様だった。努力と結果が比例しない。そんな日々に自分の無力さが目に余った▼「皆の支えだ 同志社アトム」。本校が誇る名応援歌のワンフレーズを解き明かせば、アトムとは犠牲そのものだった。僕らの役目は光り輝く同志社HEROESを後押しすること。何かを成し遂げるため、誰かを支えるためには犠牲はつきものだ。時には大切なものでさえ切り離す覚悟も必要だった▼2023年、フランスで開催されたラグビーワールドカップ。日本代表も前回大会のベスト8超えを果たせなかった。それでも、愛する桜のエンブレムを胸に戦った戦士たちは「このチームを誇りに思う」と口をそろえた▼努力を実らせるかどうかは自分次第。結果が伴わなくても、それまでのプロセスで犠牲を払えた者にはきっと誇れる何かが残るだろう。ナンバーワンになれなくてもオンリーワンになれる。くじけずに前を向け。踏まれても踏まれても、真っすぐ立ち上がる麦のように。【丸山潤一郎】

レイアウト　丸山　潤一郎

スポーツを届けよう！
ここだけの1枚で。
GAOW SHOP
STAR FORM

同志社スポーツユニオン
体育会５１クラブのOB・OGから組織されています
同志社スポーツユニオンは同志社アスリートを支援、応援致します！
http://www.doshisha-su.com/
○ウェブサイトを通じて同志社スポーツを応援しましょう！
○新年度　ウェブサポーター　募集中！
お申込み・お問い合わせ
〒610-0394
京田辺市多々羅都谷1-3
同志社スポーツユニオン事務局
TEL：0774-65-7418　FAX：0774-65-7416
E-Mail：jt-1spor@mail.doshisha.ac.jp
DOSHISHA SPORTS UNION

闘紫を、燃やせ。
苦難超えてララララ
理想の彼方
行くぞ　我等
勝利の限り
心雄々しくララララ
未来の子
皆の憧れ
同志社アトム
心ねってララララ
世界をみつめ
そうだ　我等
油断をするな
心正しくララララ
未来の子
皆の支えだ
同志社アトム

体育会学生だけが使える
メンバー制の就活情報サイト
アスプラ2025
https://asupura.com/2025/
アスプラ2025　検索

きょうと報知に同志社アトム参上
京都府のスポーツ情報満載のきょうと報知は、毎月1回、スポーツ報知（宅配・コンビニ販売分）に折り込まれます。
次回は12月24日(金)発行予定です。

※写真は9・10月号です。